
Devil Dead Night

クレド先生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil Dead Night

【Nコード】

N5255V

【作者名】

クレド先生

【あらすじ】

超人的な運動神経と頭脳を持つ銀髪の高校生、

北上^{きたがみ} 煉^{れん}は実は並行世界のスパイダの末裔。

ある日彼は自身に眠る力を危険とみなされ空間に攻撃されることになる。

だが煉は覚醒し半人半魔となり、空間ごと世界を壊してしまう。

それを見た世界神は彼を助け出し世界の修復を試みるも、

煉の強大な力の暴走で復元は不可能だった…

帰る場所がなくなった煉に、神は新しい世界に行くよう勧める。

決意した煉は神から授かった武器と共に新しい世界へ行くのだが…
そこは悪魔が存在する世界だった！
今、運命の齒車が回り出す！

Story 01 回り出す歯車 } story that begins }

時刻は夜。

日本の都内のある町。

その夜道を歩く一人の少年がいた。

その少年の名は、「北上^{きたがみ}煉^{れん}」

都内学力トップの高校に通う、少し変わった高校二年生である

容姿は上下グレーの学生服を着ており、

身長は180cm程度、足が少し長くスラリとした体形で、少し痩せているようにも見える。

顔はとても整った顔立ちであり、モデルと思われてもおかしくない。少し無表情な場面が多いのだが、

彼が気を許した人にしか見せないニヒルな笑みは

女子が見たら一目惚れしてもおかしくないものだった

髪のは長さは肩まで落としておりまとまっている。

前髪が表情をわかりに行くくしている面もあるが、本人は気にしていない。

ここまでみれば顔立ちの整った普通の高校生だ。

しかし、唯一異様な部分がある。

彼の髪は、純粹で澄んだシルバーを持つ美しい銀髪だった。

その髪を見た人は無論、染めたんだろうなどと思うことがほとんどだが、
実際はそうではない。

一度高校の教師に言われ病院でも検査してもらったが、全て自毛である。

ちなみに遺伝性のものだそうだ。

ちなみに彼は文武両道という言葉にふさわしすぎるほどの人間だ。
幼い時から文武において超人の域にいる両親に敵しすぎるほどに鍛えられている。

どのような内容だったかというと、

武の内容（父担当）

。常人では絶対に耐えられない超絶な筋トレ、体力づくり、俊足つくり（？）

。数えきれないくらいの拳法、格闘技の習得をやらされる

。剣道とそれを応用した自作技を使って模擬戦（10歳を超えたと
き真剣で模擬戦をやり始めた）

。サバイバル（近所の山に一週間放り出されるなど）

文の内容（母担当）

。孔子の論で勉強 孫子を用いた戦略

。読解力・理解力・状況把握能力・応用能力の向上

……などと、煉はいつたいどんな人間を作りたかったのだろうとさえ思える

厳しい鍛錬を積んでいる。

ちなみに文の鍛錬については
煉も習い始めた当初はこの江戸時代だと思っていたが、
これまた現在の勉学に通ずるものがあり、結構役立ってたりする。

しかしこうした訓練とは別に、
煉の家族は全員がお互いに愛し合っている、絆の深い家族だった。

その絆と鍛錬の甲斐あってか、
煉はとても頭がよく、化け物じみた動きを持ったよい手本（？）の
ような子供になり、
それは都内トップの学力を誇る高校に入学し高すぎる身体能力で有
名になるまでとなった。

しかし煉は、学校などでは気の許したわずかな友人としか話さない。
煉はあまり人との交遊をしなかった。

学校での生徒たちから見た彼のイメージは、

「寡黙で冷静」

というものだった。

その為か、何も知らない他の学校の生徒たちに
「生意気だ」といわれ煉は帰宅途中喧嘩を売られることが少なくな
かった。

そして今も、他の学校の生徒10人ほどに絡まれて、
全員軽く気絶させた後だった。
ちなみに煉はかすり傷一つ負っておらず、疲れている様子はなかつ

た。

本当は早く家に帰って母の手伝いをしようとしていたのだが、それも遅れてしまった。

それも絡んできた生徒たちによって大分遅れてしまっていた。

「つたく、絡んでくる奴も力量差とか戦略とか学べよ…」

と言っても絡んでくれというわけじゃあないがな」

今の言葉のように、煉は戦闘——戦いを好んでいるところがある。

自身が敵とみなしたもの——

自身を襲うもの

仲間を襲うもの

大切な人を攻撃するもの

これに該当する者には容赦なく殺気を放つ。

煉の場合、鍛錬の中で得た覇気が混ざっているため、軽く殺気の矛先を向けても常人とは思えない冷たさ、大きさを持っている。

もっともそれは自分が敵とみなしたものにしか使わない殺気だが。

そしてその殺気は現在、煉の目の前にある異様なものに向けられている。

そのものの姿はそれ見ている煉でさえ言葉では言い表しがたいものだった。

「背景が、ねじ曲がって、んのか……？」

それ以外にどう表現すればいいのだろう。

彼の目の前の虚空に四角の形をした白く光る線が浮き出ている。

しかもその線の中に映っている背景が渦状にねじ曲がり、

その渦が徐々に動いていく。

いや、確実に立体を作っている。

先ほどの線の四角、「結界らしきもの」からねじ曲がった空間がとてつもない速さで

見えない「何か」によってかたどられ、泥のように「結界らしきもの」からはみ出している。

そしてそれがいくらかの量が立体になったところ、

そのねじれている物体の動きがピタリと止まった。

ヤバイ

煉はそう直感した。

恐らく人為では作れないようなもの。

それを目の前にした煉は、

普段なら信じないこんな出来事を目の当たりにし驚愕と警戒しかな
くなっていた。

もつともこれを目の当たりにしてまだ警戒心で殺気を放てる煉は、
常軌を逸した精神力と適応力の持ち主でもあるのだが。

しかしその殺気は「何か」にはまったく通用していないようだった。
感情がない、というのだろうか。

それは生き物のように動くが、まるで感情がない機械。

矛盾しているようだがそうとしか言いようがなかった。

そしてそれが巨大な手の形を作り、煉を掴もうとするかのように
ゆっくりと煉に近づいてきていた。

とつさに距離を取ろうとした煉は、
自分の周りで起こっていたことに気がついた。

あの手を作っているねじ曲がった空間が
いつの間にか全ての景色を埋め尽くしていたのだ。
しかも、空間は徐々に煉へ近づいていく。

「クソが・・・！」

この状況は全く分からないものが支配している。
だがこれだけはわかる。

このままあの手か空間に触れたら確実に何かを失う。
そう煉は直感していた。

逃げるしかない
だがどうやって？
その時だった。

『St i k e a n d b r e a k i t (ぶち破れ)』

何かの声が煉の頭に響いた。
その刹那、

「っが!？」

煉は押さえつけられるかのように地面に倒れた。
突然地面に叩きつけられたため少し頭がふらついていた。
だがそんなことは常人離れた体を持つ煉には関係がなかった。
頭がふらついてるがまだ動く。

「D o n o t b e l i t t l e m e ! (俺を甘く見んな
よ!-)」

煉の口からいつもなら発せられないはずの英語が出る。
だが今の彼にとってそんなことは眼中にない。

そして煉は足に地面を踏み割る気で足に持てる力をすべてそそいだ。
まっすぐには立てそうにない。
だが立たなければ何もできない。

「お・・・らあああああああ！！！！！」

咆哮のような声をあげ、地面に張り付いていた片膝をあげた。

その時異変が起きた。

それは彼の眼前、１メートル手前までせまっていた空間の手が煉に
触れようとした瞬間だった。

空間の手が突然崩れ落ちて形を失ったのだ。

煉がふらつきながらも立ち上がる。

しかしまた何かの衝撃で地面に押さえつけられるように倒れこむ。

今度は先ほどと段違いの力で押さえつけられた。
煉の口から内臓を圧迫された証拠の血が流れ出る。

「がっ……………!!!」

強すぎた衝撃を受けた煉の視界は急速に暗くなっていった。

その中で煉は自分の視界が万華鏡のようにねじ曲がっていることに気付いた。

幻覚かはわからない。しかし煉は薄れる意識の中でこう直感した。

「俺は…消される？」

その言葉を言い終えた煉の意識は闇へと堕ちていった……

所変わって此処は神界。

神以外は「審判者」の許可なくして絶対に入れない空間である。

神界——神の世界では、さまざまな神が

「輪廻」「時間」「意思」「創造」「破壊」

などという役割を一人が一人づつ

役割を持つており、それをあらゆる世界で司っている。

そしてその中には位がある。

それは人間のように差別に使われるような「身分」ではなく、神一人一人の能力で判断される「能力区別」のようなものである。

生を受けたばかりの神なら「加護」——つまり直接物事の変化は起こせない、

下位の神と言ったところだろう。

その位の中で最も高い位に立つ神がいる。

世界神

他の神々が司る物や現象がある「空間」を創造・管理する能力を持ち、

神々の中で欠かせない存在である。

また、希少な役割という面もこのくらいの理由も説明している。

それは空間の創造などには神殺しを成せるほどの魔力と、特別な器が必要というものだ。

そしてその神の中の最高位は現在自分の作り出した間で巨大な鏡をじっと見つめていた。

見た目は人間の老人と変わらないだろう。

しかし鏡を見つめるその眼には、

子供が新しいおもちゃを手にした時のようなキラキラしたものがあ

った。

「ふむ…北上 煉、か」

そう呟く老人は手元にあったルビーに似た紅い光を放つ小さな玉を持ち上げ、
ふっと投げた。

「何かが変わり始めてるのう…」

今まで老人にとって変化は退屈しのぎの一つでしかなかった。
それが今興味の対象へと移り変わり始めていたのだ。

「変革…か？フツ、老いぼれが革新に期待するとはな…。」

そついうと老人は立ち上がり

「さて、彼をわしの世界へと移転させるかの」

霧のようにふっと消えて見えなくなった。

これが、すべての始まりであり、終わりだった。

神と少年、この二人が出会った時

物語は始まった！

Story 01 回り出す歯車 } story that begins } (後

嗚呼・・・やっちゃったZE

処女作オーラ全開ですねこれ(泣)

改めまして皆さんこんにちは

自称DMCオタ(笑)のクレドです

ほかのDMC二次小説家の方々に憧れて書いて書いちゃいました！
いやぁ・・・緊張します(;´Д`A`、、、

作品なんて大層なものになるかは分かりませんが、
とりま頑張っていきます！

それではごきげんよう (^ | ^) ノシ

2011年8月14日 本編加筆修正

Story 02 運命は常に無情に く Blade of heartless

一話投稿から一週間経ってる…だと…！？orz

煉は何を思い、何を決意するのか？

第二話始まります

「つつ……此処は？」

何もない真っ白な空間。

それ以外に表しようのない透き通った白だけで、他は何も見えない。

「…こんなじゃ雪目になるな」

それが寝起きの少年、北上煉が抱いた感想だった。

少年は仰向けの状態から勢いをつけて身軽なジャンプで起き上がる。

「つつ……しかし此処はどこだ？痛みや重みはあるし、夢じゃなさそうだが…」

ジャンプしたときに体を支えた腕にはそれなりの重みがあった。

それに自分は幻覚に見舞われるようなことは何もしてないはずだ。

「てことは…ハッ、神様の寢床だったりしてな？」

んな訳ないだろうがな

自分のくだらない妄言を鼻で笑いながらとりあえず歩こうと足を出した時、

「おお、もう起きたんか。さすが半人半魔じゃのう、回復が早いわ」

……突然少年の目の前に老人が現れた。
しかも、何もないハズのところから。

「……………」

やはり自分は幻覚作用にでも見舞われてるんだろうか？
できればそうじゃないと願いたいと思いつつ、煉は眼をこすつても
う一度前を見る。

やはり老人がいる。
しかも何か喋ってる。

「おや？スルーかいな」

「…頭痛くなってきたぜ…」

正直この老人を無視したい気持ちはある。
だがここにこの老人しかものを尋ねられそうにないことも事実だ。

それに雪目になりそうなこの場所の白一色も相まって煉は頭痛を抑えられなかった。

「爺さん、此処はどこなんだ？あと、この白一色の景色は何だ？」

「これか？わしがお前さんの為に用意した空間じゃが」

「悪いな爺さんちよつと用事があるんで帰るぜ」

やはり関わらない方が良さそうだ

瞬時にそう直感し、踵を返してその場を去ろうとしたが――

「わし以外には誰もおらんぞ。

そもそも此処はわしとお前さんが話すために要した場所じゃからな。

……まああんな空間の手に排除されかけたらこんなことをほざく老いばれなぞ信用できんかのう」

老人が何か知っている様な口ぶりで話してくる。

手――

それを聞いた煉はピタリと止まり――

「あんた…それはおふざけか？それとも……」

殺気を込めて老人を睨んだ。

当然だ。あんな戯けた空想のような出来事の後には目覚めた後に、事情を知った口ぶりで軽く笑われたのだから。

「あんたはあれ（・・・）の何かを知ってんのか？」

それを聞くと老人はふっと笑って右手を前に出した。

「がつつ!？」

すると突然とてつもない重力が煉にかかる。

最初は驚き、圧力に負けて両膝をついた煉だったが、どこかこの重力には覚えがあった。

（この感じ…さっき二回目に俺を押さえつけた力か!？）

そう、あのねじ曲がった空間に出くわしたときに、

一度体を押さえつける力を押し返して立ち上がった彼をもう一度押さえつけた力。

あの時は最初の何十倍もあるかと思うほどの力で押さえつけられ、血も吐いてしまった。

「フツ、どうじゃ？空間の重さは。先ほどとまったく同じじゃろう？」

こいつの仕業か・・・

後でブン殴ると決めた煉だったが、まずはこの力をどうにかしなければいけない。

「先ほど耐えられもしなかったお主が、果たしてそれに耐えられるかな？」

確かに、普通なら彼に押し返すことは不可能。だが――

「フウ……」

眼を瞑り、意識を集中させる彼の姿は先ほどとは段違いの気迫だった

「Ha!!」

精神を一瞬だけ集中させた後、一気に力を入れる。

そして――

「huh、こんなもんか？案外軽い重さだったな」

立ち上がった。

重さを感じさせないかのように、いとも簡単に。

（なんだ……これは？今までより体が軽いし、力も出やすい。）

表情にこそ出さなかったが煉は自分の体の変化に気付き、驚いていた。

だが

（ま、今はそんなことを気にしてる場合じゃねえな、っと）

そう、煉が今一番知りたいことが目の前にある。

何故、老人が右手を差し出したただけであんな力が働いたのか

そして何より

何故、老人があのかと同種のもを出せるのか

もしかしたらこの爺さんが俺がここにいることと関係してるかもしれない

そう確信していた。

老人の方へ向き直ると、若干の驚愕とどこか嬉しそうな表情でこちらを見つめている。

・・・嬉しそうな顔は癪に障るな。とりあえず老人虐待じゃないが正当防衛で殴ろう。
そのまえに

「……あんたいつたい何者だ?」「神じゃ」

・・・・・・

「オーケイ、殴られたいんだろ? 安心しな、顔が原型とどめない程度までしか殴らないから」

とりあえず老人の即答とその内容がふざけたものだった。
頭痛が大きくなっている気がする…

「ま、待て落ち着け。仕方ないのう……」

彼を見てあわてた老人が今度は左手を前に出した。
また何か来るかと身構えた煉だったが、何も起こらない。

フェイントか？

そう思った瞬間、

「！？これは……」

頭の中に情報が流れ込んでくる。
それは異質な量と……中身だった。

スパアアアアアダアアアアアアアアア！！！！！！

裏切り者に報復を！
和が同志の仇！

ダンテ、バージル、お誕生日おめでとう

今だけお前に付き合つてやろう
合言葉は覚えてるか？

Jack
pot!!!

ダンテめ！魔界を封印しただと！

ダンテ エエエエエエエエエエエエ！！！！！

俺の子孫に残すか・・・

親父の力を

巨大な覚醒型魔力反応感知

空間排除機能作動

対象「北上 煉」 詳細 並行世界におけるもう一人のスパイダの
末裔

「……………」

「落ち着いたか？」

ふと気がつく、老人が煉の額に手を当ててこちらを見ていた。
立つために体を支えていた両足が膝をついている。
自分より身長が低いこの老人が自分の額に手を当てられるのはその
ためだとおぼろげに判断できた。

「俺は……許されないことをしてしまったのか」

「……………ああ」

信じられない内容の記憶の中身。
自分が覚醒したことによって崩壊した世界
壊れた空間によって今までの「記憶」が「知識」のような残滓とな
っていること

自分がおとぎ話の中に出てくるような魔剣士の末裔
この身体が半人半魔であること

そして……

自分は今もう家族にも、友人にも、これから出会うであろう様々な人々にも会えないということ

「…なるほど、な」

涙は出ない

知識やただのインプットされた情報のようなものになった今までの
思い出は、
煉にとって涙を流すほどの感情移入も、それを悲しむほどの情報も
なかった。

「ハッ……」

自嘲気味に笑う。

こうなったのは自業自得。しかもその世界にいる全ての人々の未来
を奪ってしまった。

だが己に憤ることも、事態を悲しむこともできない自分を、

ただ、笑った

そしてそれはいつしか、出るはずのない彼の涙が瞳からこぼれるま
で続いていた。

あれから一時間以上経った。
涙も笑いも枯れた。

しかしそれは己を嘲けて罪を後悔する表情と眼ではなかった。

「生きて償える…か」

彼は老人にあることを知らされた。
話の内容はいたってシンプルで、短時間で終わってしまうものだった。

しかしそれは彼の中である決意を生むまでに深く刻まれていた。

「俺がいても均衡が崩れない世界へ送る、ね」

そう

今回の出来事は彼の強大な力によって起きた力の均衡の崩れが原因である。

ならば彼がいてもバランスに支障の出ない世界なら煉は存在してもいい。

そしてその世界にこの老人、神が送ってもいいというもの。

そう話すと老人は一言言っただけ霧の様に掻き消えてしまった。

老人が最後に言った言葉

深く深く自分の脳裏に焼きついたであろう言葉

『お主が今回のことを己の罪だと思ふのなら、

この選択肢を選びお主が消した人々の未来の分まで生きて、己の
中の罪を償うがいい』

「そんなもん・・・答えはとうに決まってる」

そう言っただけ彼は立ち上がる

「例えそれが俺の自己満足であつたとしても」

決意の眼差しで

「必ずやり遂げる」

もう泣かない

後悔しないために自分はこの選択肢を選ぶ

——そう決めたんだ

そう言う waited いたかのように老人がどこからともなく現れる。
その顔は笑っている。

「・・・さて、選択肢は選べたかのう？」

「・・・ああ」

そこがどんなに苦しくても俺は生きる

だから——

「俺は・・・その世界で生きる！——！」

ゆっくりと

ゆっくりと

変革の物語の始まりへ

時計の針は

ゆっくりと しかし着実に

始まりへと近づいてゆく

皆さんこんにちは、クレドです

次話投稿が遅くなつて申し訳ありませんでしたぺこま(〵 ; m)

三(m ; 〵) m ペコ

いやぁ・・・長いっすねwなんでこんなになg・・・痛い！石投げ
ないで！

それでは次回予告

新しい世界へ行くことを決意した煉は
長剣デッドファングと「レイン」という新しい名前を授かり神の
もとを發つた。

一方その新しい世界では・・・

次回 「飛び立つ変革と嵐の予感」

2011年8月13日

予告部分加筆修正

2011年8月13日

本編加筆修正

Story 03 飛び立つ変革と嵐の予感 Inevitable or

遅くなって申し訳ありませんペコッム（――・（ム）≡（ム）・――（――ムペコッム

マインドキュメント初期化ってどういつことですか…

第三話、始まります

「——で？このクソでかい剣は何だよ」

正座している老人の目の前で腕を組んで仁王立ちで睨む少年——
北上 煉が言う。

声色は少しドスが利いておりあからさまに不機嫌さがにじみ出ていた。

その光景はある種のシュールさを醸し出していた——

その場に異常な大きさの両刃の長剣がなければの話だが。

「こつこつというのが必要な世界なら先に言えよ……」

煉が呆れたようにして頭をかきむしる。

すると正座させられていた老人が声をあげた。

「いや、お主が行ける世界となるとやはりお主の先祖がいるもう一つの世界じゃなければいかんのよ」

「先祖、ねえ……」

老人の必死の弁明が続くが煉はそれを無視する。彼の先祖とはかつて魔界を封じた伝説の魔剣士、スパイダのことである。

煉がいた世界ではおとぎ話にもなっていたほど有名だ。

もっとも有名なのは人間界にぎやだけの話ではない。悪魔にとって魔界を封じたスパイダは魔界中の悪魔の敵とみなされていた。

そこでスパイダの息子であるダンテは魔剣士の力を子孫に封印した。後々の子供たちがこの力のせいで辛い人生にならないようにと。

しかし何の因果か煉はその力を扱うのに最も適した存在だったらしい。覚醒したおおまかな原因はそれだというのが老人の主張である。

——そして老人によれば、

煉の身体には悪魔にとって裏切り者である魔剣士の血が流れているため

むこうの世界では絶対に悪魔に狙われるだろう、とのこと。なので護身用に必要らしいから持って行けとのことだった。

とりあえずそれを先に言わずに突然剣を出現させてケラケラ笑っていた爺さんは殴った。

（まあ、子孫の心配してくれただけでもありがたいな）

煉は心の中で自分がいた世界のダンテについて考察していた。

これから行く世界のダンテは煉の居た世界の歴史とは違うという理由で

まだ存命しているというのだ。

それも自分の元居た世界とそう変わらない時代に。

「俺にとっちやダンテは親父みたいなもんだな」

無意識に声に出してしまった。

気付いた時には老人——世界神が喋るのをやめてこちらを不思議そうに見ていた。

「お主は一応2000年前から何代も続くスパイダの一族の一人なんじゃが、

親父というのは何故じゃ？直接的な血縁ではないんじゃないぞ？」

「そりゃ、な。けどダンテから俺の代までの記憶はない。

恐らく封印された力のため悪魔も足取りがつかなくなったからどうでもよかった部分なんだろ。

だから俺の記憶にあるのはスパイダとダンテのことだけ。実質親父みたいなもんだ」

面白いことを、と老人がさもおかしそうに言う。

正直自分でもこの記憶の全貌は把握できていない。

だからもう一つのスパイダの居た世界はどうなっているのだろうと少なからず興味を抱いていた部分もある。

歴史が違うため家系も何もかもがこの世界とは違う。

それが先祖の話となればなおさら興味がわくのは当然だ。

「……とにかく、行ってみなきゃ、な」

俺の償いでもあるし、な……………

「…よし、扉の用意はできたぞい」

「ああ、それじゃ…」

煉が長剣を背負って先ほど現れた光る扉に向かう。
血族の力のおかげか、長剣は相当な重さがあるはずだというのに軽々と持ち上げることができた。

何回か素振りなどをしてみたが、幼少時から訓練していたためか自由自在に扱えた。

ちなみに何故かそのまま背中につっついていいる（……）。
しかしこれ以上老人のやることに何か突っ込んでいては頭がいつぱいになるので、

煉はそれについて考えるのをシャットアウトした。

そして扉を開けようと手を伸ばした時、

「あ、そうじゃそうじゃ」

「……なんだよ？まだ何かあるのか？」

老人が突然大きな声を上げたため煉は若干煩そうな表情で振り向く。すると老人がかなりすつとぼけた発言をしてくれた。

「お主には新しい名前を授けなきゃのう」

「……どういうことだ？新しい名前なんて必要ないと思うが」

老人が少し面倒くさそうな表情で説明する。

「元々違う世界に行く時点でお主の居た世界の名前は通用せんかったんじゃ。」

これから行く世界では北上 煉と言う名前は使えんからな。歴史が曲がってしまう。」

「オイ待て。これから行くのは並行世界じゃないのか？だったら前と同じ名前でも問題ないはずだが……」

「歴史が違うからのう……それ以外にも理由はあるんじゃないが、おおまかなものはこれじゃな」

本当に面倒くせえな、異世界旅行ってのは

煉は心の中で本気でそう感じた。

…まあ、仕方ないことなのだが、と老人の説明を理解はしていたが、どうにもその業務手続きのような感じがぬぐえない。

「お主の名前はレイン。これでええかの？」

「レイン、か。わかったよ」

彼がそう言つと老人は満足した表情になり、こう言つた。

「それでは旅立つがよい。お主の第二の人生に幸あらんことを・・・」

それを聞いた煉…いやレインはフツと笑い

「受刑者に幸：か。笑えねえ」

そう言つて扉を開け――

「じゃあな、爺さん。世話になつたぜ」

開かれた光の中へと消えていった。

こうして彼の物語は序章プロローグを終え、

時計の針は、またゆつくりと動き出す

始動までの道のりを 着実に

~~~~~  
~~~~~

「…………ん？」

銀髪の男性が何かに反応したように雑誌から目を外す。目線の先には特に何も無い。

それでも事務用の机の上に組んだ両足をのせている姿勢は変わらない。
かなり容姿の整った、とても背の高い20代後半か30代前半の男性。

——カッコいい髭面

それが他人から見た彼の第一印象だろう。

「どうしたの？また悪魔？」

その彼の僅かな反応を見逃さなかった女性がいる。

彼女は男性が足を載せている机のわきに寄りかかり、二丁の拳銃を弄っていた。

彼女は美しい金髪のロングである。

自他共に認める「相棒」という存在である彼女にとって、
彼がそんな反応するのは珍しくないとため割と簡単にその動作に気がついたのだ。

「悪魔じゃないな…それならもっと派手に動くはずだ。」

男性が雑誌に目を戻す。

「ふうん……ねえ、賭け、しない？コインで」

「……？……ああ、いいぜ。俺は裏だ」

「私は表ね。それじゃ……」

女性がポケットから薄汚れたコインを取り出し、指でピンと弾いた。
そして落ちてきたそれを掌と手の甲で受け止め――

「……………裏ね。あなたの勝ち」

「…h a、俺が賭けで勝つとはな。明日は大雨か？」

男性は雑誌を読むのをやめ、机の上に放り投げた。
女性がフツと笑う。

「たとえ嵐でも、あなたは面白がるだけでしょ？ダンテ」

「俺は刺激がありやなんでもいいさ、トリッシュ」

また別の場所――

「ただいま……」

「おかえりなさい……あら？どうしたの？」

紺の大きなコートを着た銀髪の青年が、少しぎこちなく帰宅の挨拶を済ませる。

それを聞いて出てきたのは茶髪のポニーテールの女性が出迎えるが、長年ともに過ごしてきた彼の様子がおかしいと見破るのは彼女にとつて容易な事だった。

「なんでもないさ……ただ、少し変な感じがしたんだ」

「予感？」

青年が洗面所の水で顔を洗う。

その表情はどこか険しいところがあつた。

「…もしかしたら、また大きなことが起こるかもな」

それを聞いた女性は、少し不安そうな面持ちになる。

当然だ。彼女も、彼女にとっての弟分である彼も、彼のいう「大きなこと」に巻き込まれさまざまな苦痛を味わい、大切なものを失った。
けれどもこうして二人で暮らせていることには感謝している。

青年は彼女の表情を見るとしまった、と思い

「…ごめん、キリエ。」

「…ううん。大丈夫。…あ、晩御飯の用意するね！待ってて、ネロ」

場の空気を変えようとした彼女はそう言って台所へ向かっていく。

（明日は嵐が来るかもな…）

偶然か必然か

この時この世界の二人の魔剣士の子孫たちは

これから起こるであろうことを

同じ気持ちで考えていた

それが現実になるとは知らずに…

第一章 完

第二章へ続く…

長え…（泣）…

長らく更新せずに申し訳ありませんでした。
学校が近くなってきた…（泣）

それでは次回予告

扉の光によって飛ばされたレインが到着したのはなんと荒野のど真
ん中だった。

そこには彼を殺そうと現れる悪魔がいくつも現れる。

彼はどう戦うのか？

そして彼が初めて出会った青年の正体とは？

次回 「荒地のダンス」

S t o r y 0 4 荒地のダンス ｝ P a r t y w i t h t h e d e v i l

戦闘描写難しい…（；；；）

今回はあとがきにあるミスについて謝罪文を書かせていただきます

それでは第四話、開幕です

Story 04 荒地のダンス ｛ Party with the devil

荒野というのは、さびれた風景が第一印象だという方が多いと思う。
地味な色の土、雲のかかる青空…など、そんなイメージが多いのではないだろうか。

その中心を一人の長身の少年が歩いていたら、嫌でも哀愁感が漂ってしまっただろう。

「あの爺さん… 今度会ったら全力で叩いてやる」

もつとも当の本人は全く気にしていなかったらしい

黒のジージャンとジーンズそしてグレーのＴシャツを着ている少年

—— レインは、

いつの間にか服装が普段着になっていたうえ何故か荒野に飛ばされていた。

彼は神の空間で用意された扉を抜けた後、光に包まれて意識を失っていたらしかった。

そして次に目が覚めた時は此处—— 荒んだ土地に寝転がっていたのだ。

「見渡す限り山と荒地だな…山を越えれば民家なんかあるとは思
うが」

到底期待はできない、な

それがこの状況における当然の答えだった。

だが彼の中ではそんなことは頭の片隅にしかなかった。
こうして山に向かつてる最中もこの数日間どうするかを的確に考
えている。

流石、一ヶ月間サバイバルで生き延びた高校生であった。

歩き始めて一時間

レインはいまだに息も乱さず汗もかいていない。
覚醒した体ではこの程度の運動など小指を動かす程度のものだ。

だがそんな安心できる状況とは裏腹に、彼の頭ではある疑問が渦巻いていた。

（あの死体…あの体は何だったんだ？）

~~~~数分前~~~~

しばらく適当に進んだ道のりの途中、  
レインは錆びれて字が読めなくなった大きな看板をぶら下げた一軒  
家を発見した。

民家があるのか、と思ったレインはその中へ入ろうとしたのだが、  
不用心に開け放ったドアの中からは鼻を突く人間特有の液体のにお  
いが漏れており、  
そのきつい刺激臭は彼の鼻を刺した。

悪魔か？

レインは頭の中にある先祖の記憶から悪魔の情報を取り出そうと試みる。

世界神に与えられた記憶の中ではもう悪魔も死体も嫌というほど見てしまった。

—— もっとも彼は過去の出来事ですでに原型を失った人間に慣れてはいるのだ

—— いや、悪魔だったら半同族の俺が気づけるはず

（少し考えればわかることだろうが…）

レインは自分の考えが浅いことに少し苛ついた。

そして何よりこの状況でのんびりと過去のことを思い出している自分に腹が立った。

ドガッ！！！

その感情をぶつけるかのようにドアの向こうに倒れていた邪魔な箆  
箆を蹴り飛ばす。

埃と砂が舞ってしまったが、かなり大きかった視界の障害物が排除  
された。

そして埃がおさまった部屋の中を見渡すと

「やっぱりな……」

あたりは一面血の海だった

その中にいくつかこの家の住人と思しき肉塊が転がっている。

壁には大量の赤黒い血しぶき。

鋭い何かで切り裂かれた農耕用らしき棒——恐らく抵抗しようとして切られたものだろう。

そんな状況でもレインは少しも混乱している様子を見せなかった。

ただ、運悪く非道な人外に襲われた彼らを憐れみ、  
せめてもの供養としてかつて楽しい人生を送るはずだった遺体に合掌した。

それから彼はある不可解な点に気付いた。

遺体となった彼らの肉塊から一部分が無くなっていたのだ

本来悪魔は人の四肢を切り裂いて殺すことなどに感情など覚えないため、  
普通は悪魔に襲われた場合ただの肉片になるはずである。

しかしこの遺体は明らかにおかしい。

「脳や心臓だけ（…………）が丁重に切り取られてるな……」

レインは深い疑問を持った。

これは偶然なのか、それとも――

(……状況が分からない今こんなことが解決できるとは思えないな……)

という決断を下した彼は、少しその場を調べた後また歩き出したのだった。

~~~~~

「やっぱり偶然だったのか……？」

いい加減物も状況もそろつてない事にただ疑念を抱くのも疲弊するばかり。

そろそろこの考えから手を離して頭の片隅にでも追いやろうかと思つた

その時

キ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ

金属音のような音と共にレインの数メートル前方の地面に巨大な穴が出現する。

「……h a ! おでましか！」

覚醒と記憶の件もあつて若干戦闘狂の気が増したレインの顔がニヒルな笑みを浮かべる。

その顔はこれから始まるであろう戦いに期待を隠せぬ嬉々と表情だった。

「ギギ…ギギギギ」

奇怪な呻き声をあげながら穴から飛び出す十数もの影。
そしてその後ろからは何も無いはずの空間から穴が出現し――

「Hun 荒野のカンガルーにしちゃ少しでかくないか？」

犬を一回りも大きくしたような大きな体を持ち、
その反面軽いフットワークと俊敏さを誇るであろうそれ（・・）は、
雄叫びを上げながら鋭く巨大な爪をかまえる。

かの魔帝が作り出した異形の精鋭

その中でもこれらは地理や環境に適応し進化したものだろう。
その強靱な足腰はこの広いフィールドを駆けるのに最適であった。

そして呻き声をあげながらその腕に縫い付けられた鎌や斧を振り回すかかしの様な悪魔

スケアクロウ

魔界で生まれた甲虫がおぞましい数の群れをなしてツギハギの布袋に入った姿である。

色とりどりの布と白い仮面をつけたその姿は、レインの目の前に十数体にも及ぶ数で出現した。

「オイオイ、こんだけ集めて動物園でも開くつもりか？」

その遠まわしに侮辱した言葉に怒りを見せるかのように、
スケアクロウがそれぞれ腕に付いている刃物を振り回し始める。

「それだっ たら開くのは博物館だな」

——その刹那、正面から六つの影がレインに飛びかかる。

「…遅えよ！」

一閃

彼の持つ無骨な銀の長剣が、襲いかかったスケアクロウの体を空中で両断する。

真一文字のその一太刀はいつも簡単に悪魔の身体を切り裂いた。

「ギギヤアアア――！」

叫び声をあげながら切られた部分から黒い体液を出す六体のスケアクロウ。

やがて真つ二つになりかけたその身体は塵の様なものに変化し消えていった。

「一列になって飛びかかるとそういう風になるって習わなかったか？」

レインがその姿をあざ笑いながら剣を地面に突き刺し、それに肘を置いて寄りかかった。

覚醒によって得た馬鹿げた筋力により、
外見はあまり変化していないものの彼自身その力の上がり具合を自覚できた。

実際の重量は測っていないが、今の刺さり具合からするとこの剣は60kgはあるだろう。

何の力もいれず重力に従って落ちた切っ先がこれほど深く刺さるとはレインも思っていなかった。

何よりそれを軽い木刀の程度の重さにしか感じられなかった自分の力に驚いたのだが。

（つつてもこれで四割程度なんだがな…

一体本物の魔人てのはどんだけ気の遠くなる力を持ってるんだか）

そんなことを考えていると眼前の悪魔たちが同族を殺られたという怒りの咆哮をあげた。

その雄たけびはレインの闘争心をより煽った。

そして――

「いいぜ…荒野のイカれたダンスと洒落込もうか！」

彼は笑い――

「Shall we dance?」

再び颯爽と剣をふるう

レインの剣術は我流のそれである。
父親から様々な剣術や流派の剣術を教え込まれ、マスターしたが
彼にとってそれはあくまで我流の土台にすぎない。

つまり、正当な剣技に縛られることはない。

しかも基本はマスタークラスの無数の剣術、
スペックは魔人の血を受け継いだ超人的なそれ（・・・）だ。

剣技の達人がいくら集まろうとレインには勝てないだろう。

故に彼は今、不規則且つ素早い動きをする悪魔の動きを簡単に捉え、
切り裂くことができた。

「H a a a a a a a a a !」

スケアクロウの振るう鎌を僅かな動きでかわしつつ一瞬で接近。

そして

「邪魔だ！」

斬る

一瞬で繰り出される右からの袈裟切りがスケアクロウの体を分断させる。

アサルト二体が左右から飛びかかるが、それもバックステップで避ける。

「Don't get so cocky!! (ナメんじゃねえぞ!)」

彼が神から授かった長剣——デッドファングの切っ先を右から来たアサルトの腹に突き刺す。

「Get lost! (消えな!)」

弱りながらも深く突き刺さった剣を抜こうと叫びもがくアサルトを剣ごと上に振り上げ、

左から押ししかかってきたアサルトに叩きつける。

重さと切れ味もあってか、デッドファングは突き刺していたアサルトの腹を切り裂き、

馬鹿力で同族を叩きつけられて嫌な呻き声をあげたもう一匹のアサルトの頭部まで両断していた。

一気に二体の悪魔の血がしぶきをあげたためレインの服と剣が血まみれになる。

しかしそんなことは気にしていない。

剣を下に降って付着した血を落とすと、彼の後ろから隙アリとばかりに数体の

案山子のような悪魔が飛びかかる。

「Break！（砕ける！）」

振り向きざまに放つ回転切りが手前の三体のスケアクロウを屠る。

次にはアサルト。勢いよく飛びかかったそのスピードは、

レインの身体をとらえるかと思われたが――

「Is that all you've got?（それで全力か？）」

それは起こらなかった。

一瞬にして構えなおした剣は軽々と空中でアサルトを捉え、頭から切り裂かれ貫通したのだ。

「アサルトの串刺しか…売れねえな」

そう吐き捨てるともう一度剣を振って血とアサルトの身体をなぎ払う。

「二番煎じどころじゃねえな…いい加減飽きるぜ?」

そう言いながら持ち上げたデッドファングの鐔でこんこんと肩を叩き、残った悪魔の群れを見渡す。

悪魔には感情はないが、この時は彼らも恐怖で頭脳が一杯だっただ

ろっ。

当然だ。今まで捕食していた人間という弱く脆い種族の中で、ここまであつさりと悪魔を殺せるものはこの人外は見たことがないだろう。

——正確には彼は人間ではないのだが

その為か彼らは悪魔にしては珍しく攻撃を辞めて離れた距離からレインの様子をうかがっていたのだ。

すると、距離を置いて対峙していたレインと悪魔の間に異変が生じた。

先ほどとは違う、嫌悪感を抱くような金属音が荒地に鳴り響く。

そして穴が空き、中から四つの巨大な影が這いずり出てきていた。

「あれは……」

丸々として大きな布袋に、巨大な鎌を爪のように装備した両手。
そして背中に付けた大きな斧に、スケアクロウと同種の低く気味の
悪い笑い声――

――
メガ・スケアクロウ

無数の魔界の甲虫が巨大な布袋に入ることによって誕生した個体。

その巨体と大きな刃物はいかなる障害物をも除外し、
時には体ごと回転して殺傷力を高めることもできる。

スケアクロウより格段に上の強さを持つ中級悪魔である。

「Huh…新たなショーを見せてくれるってか？付き合ってやるよ…」

そう言いながらデッドフアングを構えなおす。

「暇つぶし程度にな！」

咆哮の様な声をあげて唸るメガ・スケアクロウと、銀の長剣を持つ剣士が壮絶な戦いを始めようとした。

だが

「ギギイイイイ！！？？」

それは現実にはなかった。

突如としてメガ・スケアクロウの体を何か（・・・）が掴み、ぶん投げたのだ。

それは腕

いや、異形の腕と呼ぶ方が妥当
だろうか。

青白い光を放つ手に、紅い甲殻の様なものをつけた腕。

そしてその腕の主は

「…お前は？」

レインと同じ銀髪を持った――

「……てめえは怪しい野郎だが名乗っててやるよ」

悪魔の腕を持った――

「……俺はネロ、デビルハンター悪魔狩人のネロだ」

銀狼のような青年だった

偶然か否か、魔剣士の子孫は意外にも、

荒野で奇数な出会いを遂げたのだった

ども¥（＾―＾）クレドです

今回の原稿なんですが、戦闘描写が難しいのなんの…

前回の投稿からかなり時間が経ってしまい申し訳ありません

ガタガタ……

え？なぜ震えてるのかって？

それは…

レイン「まあ当然の罰ってやつだ」

……レインにデッドファンングの切っ先を首筋に当てられてるからです（汗）

レイン「なんでこうなってるかと言うと、

このバカ（作者）があるミスを犯したから、という理由だ」

バカはひどくないですか！？

レイン「…斬るぞ？」

すみません（土下座）

えゝミスと言いますのは、

実はこの間この小説に応援の文を書いて下さったスノーマン様の

感想を…

手違いで消してしまいました（泣

レイン「どうやったらユーザーページ編集集中に感想消せるんだよ…」

寝ぼけてて…（土下座

レイン「まあ斬らないから次回予告すませて最後に誠心誠意謝れよ？」

ハイ…

それでは次回予告

ネロと名乗る青年は、レインの記憶の中の史実には存在しない魔剣士だった。

ひとまず悪魔を倒そうと妥協した彼らの、
イカれて狂ったパーティーが始まる！

次回「二匹の狼」

最後に

スノーマンさん、感想削除本当に申し訳ありませんでした。

このミスを埋められる小説を作るよう精進したいと思います。

本当に迷惑をおかけしました

2011年9月8日 本編誤字修正及び加筆

Story 05 二匹の狼 〈Two dangerous persons〉

スノーマンさんのご指摘をうけて訂正しました（2011年9月28日）

最初に跳躍したスケアクロウの腕の鎌が、ネロの身体に売れるかと思われた瞬間――

→「売れる」の部分、誤字です。
正しくは「触れる」です

スノーマンさん、ご指摘ありがとうございました

やっぱり戦闘描写難しい…orz

クレドでございまゝす（サザエ風）
っと冗談はともかく、今回も戦闘です

私の駄文で楽しめるかわかりませんが…
アドバースなどあれば言っていただいて構いません

それでは第五話、ショータイムです

Story05 二匹の狼 〈Two dangerous persons〉

レインとネロが対面する数十分前

「どうなってんだ……？」

銀髪の青年 ————— ネロは困惑していた。

一時間前、家でキリエが買い物から帰ってきた直後、彼の直感は動いた。

己に宿る、ある魔剣士の魔の具象——デビルブリンガーが青く光り出したのだ。

大概こういう強い光を放つ時は複数の悪魔がいる。
今までの経験上そうだった。

他に反応するとすればあの軽口をたたく赤いコートの髭面の所有物程度だとネロは確信していたのだ。

しかし今回は何かがおかしかった。

光の強さを見る限り複数、もしくは強力なのが一、二体いるはずだが、
近隣からはそのような情報は上がってこない。

悪魔に敏感なこの街ならなおさらに反応していないのはおかしい。

そう感じたネロは、キリエにこれから出かけるということに関しての謝罪とことわりを入れ、
いつもの武器と紺色のコートを着て光が反応している方角へ走って

行つたのだつた。

我が家のある都市から三十分ほど歩いた（走り抜けた）寂しげな空
気を漂わせる荒野。

ネロの右腕はここに目的のものと叫ばんばかりに光り疼いて
いる。

荒野の砂埃が紺色のコートに当たり赤茶色の汚れを作っているが、身長の高いネロの足元で起こっているそれは本人にあまり気にする物ではなかった。

「……それらしきものは見当たらないな……」

物質であろうと生物であろうと、魔力を持っていれば反応するのがこの右腕である。

何も無い場合、魔界からの刺客が飛び出すフザけた孔が空くのだが、それにも反応しないということは――

「……ハズレ、ってか？」

ふざけるな、とネロは思った。

自分を幼い時から見守ってくれた姉のような存在を置いていった上に、

ここまで走らされて、ハズレでしたから帰れ、などとそんなことを納得できるはずがない。

それに、今回は少しおかしい部分もある。

もし今ここで潜んでいるかもしれない悪魔を見過ごして、

また半年前のように住民たちを危険な目に合わせることはできない。

なによりそれが、キリエの望みなのだから。

キ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ

「…来やがったか。クソ悪魔共」

苛立ちがこもった眩き。

それに呼応するかのように鳴り響く金属音のような。

「ギギギギギ…」

奇怪な呻き声とともにスケアクロウとアサルトが虚空から現れる。

並の人間なら悲鳴を上げて逃げてしまうその恐怖を感じさせる姿は、銀髪の青年には全くと言っていいほど効果がなかった。

むしろ

ダアアアン!!

怒気を煽ってしまった

「Scum…（クズが…）」

ネ口から殺気の混じった悪態がもれる。

あからさまな苛立ちの雰囲気を纏っている彼の右腕には、
その大きな鉛を放つ口から硝煙を上げる銀色の獲物が握られて
いた。

二つの大口径の銃口、空から見え隠れする太陽の光を綺麗に反射す
る銀の塗装。

【ブルーローズ】

彼自身が考え、自らの手で造った六連装大口径リボルバー。

その威力は長年の間悪魔と戦ってきたネロの記憶を確認づけるかのように、

一体のアサルトの頭部に軽々と風穴を開けていた。

撃たれたアサルトが、その既に死んだ体を荒野の土煙りの中に重く鈍い音を立てて、ゆっくりと倒れる。

突然の出来事に怯む悪魔を、使い込んだブルーローズのグリップを握るネロの鷹の様な双眸が射抜く。

それを見て再度怯み動けなくなる異形達。

状況としてはまだ悪魔達に勝機はある、がそれは数だけの話である。

太古の時代、小さな哺乳類が何匹集まろうと、巨大な体躯を持つ恐竜に勝てなかった。

哀れな異形達は、まさにその恐竜の逆鱗に触れてしまったのだ。

広い荒野には先ほどの銃声がまだ鳴り止んでいないのか、風に交じって低い音が流れていた。

それはもしかしたら、彼を怒らせてしまった悪魔達の後悔による嘆きの声かもしれない。

しかし懺悔の時間はそう長くはならなかった

—なぜなら—

「Cut off!!!」(叩き斬る!)

処刑はすでに始まったのだから

2分後

「H a ！ こんなモンか？」

紅い甲殻のついた右腕で、彼の愛剣であるレッドクイーンで斬り飛ばしたアサルトの首を

ポンと軽く投げて弄る青年

ネロが呟く。

彼の周りには十数もの悪魔の死体が大小さまざまな肉塊となつて転がっていた。

最初の銃撃で野生の本能の中で恐怖を感じた悪魔達に、恐れた対象であるネロには敵うはずもなかった。

「腕の光は弱くなっちゃいるが…」

— まだいやがるな

右腕はうつすらとだがまだ淡い青色を光らせている。
まだ悪魔かそれに関係している物がある、ということだ。

「…ここまで多く来たのは久しぶりだな」

フォルトウナでは悪魔の数は少ない方である。

半年前のサンクトウス元教皇の起こした事件以来悪魔の数は多くなつたのだが、

それでもよく集まって一度の襲撃に10体が最多だった。

危険度もそれほどではない。

先ほどのアサルトやスケアクロウのように、まだ軽く相手のできる手合いが

フォルトウナで確認されている悪魔のほとんどを占めている。

が、

「この数…ざっと見ても18はいるな」

そう

彼が半年前から記憶している悪魔の最多出現数を軽々と越えた数。

何かがおかしい…

そうネロの考えが彼の頭をよぎった。

またあの悪夢が起きる…

自分の恋人であり姉の様な人であるキリエを傷つけ、

キリエと自分をよく見てくれていたクレドを死なせ、
フォルトゥナに住む大勢の罪なき善人の命を奪った、

あの事件のような出来事が…

いつから考えにふけりすぎたのだろうか。
気付いてくれとばかりにまた右腕が強く光り出していた。

「…ハッ、オーケイ、今はお仕置きの時間だったな！」

ネロのブルーローズを握った右腕が上に上がる。

それと同時に必然的に空に向けられた銃口から鉛の魔弾が放たれた。

「数え間違いだったな」

彼の後ろで鈍い音とともに動かなくなった異形が倒れこむ。

「19だったか」

砂埃が舞う中、ネロは光の示す場所へと歩き始めたのだった。

そして現在に至る。

回想の中での右腕の反応を思い出していたネロは、
己が投げ飛ばしたメガ・スケアクロウの巨体と、目の前にいる銀髪
の少年を交互に見比べた。

メガ・スケアクロウは確かに中級悪魔で、魔力もそれなりにあるだ
ろう。

それに今は4、5体が魔界の穴から出現している。獲物として巨大
であることは間違いない。

彼の視線の隅に下級悪魔の群れもたむろしているが――

（これを全部足してもあの光の反応には及ばない）

ネロは状況を整理しようと試みる。

悪魔は人間を襲う。

此処に被害者となった人間の遺体や痕跡は見当たらない。

眼前の少年はどこからみても人間だという姿であり、
なお且つそこらじゅうに少年が倒したと思われる異形の死骸が散ら
ばっている。

そして彼が握り、構えているネロの持つ片刃の剣と同程度の長さの
刀身の血濡れの長剣――

目の前にいる詳細不明の銀髪少年に、この右腕は反応した。

彼の頭に浮かんだ答えはそれ以外皆無だった。

（コイツは…一体何なんだ？それに……）

ある疑問が彼の頭に引っかかる。

（何故俺は名乗ってしまったんだ？）

咄嗟の事とはいえ、ネロは普通見ず知らずの人間においそれと自ら名乗る真似はしない人間だった。
だが、今の短くお互い警戒している中での会話の中で、ネロはあっさりと名乗ってしまったていた。

（あの髭面との会話に似てたから、か？ハッ、くっだらねえ）

魔剣教団本部でのあの男との会話。

お互いの名前を一度呼び合っただけのこと。

——いや、アイツはスパードの息子だ。
何故、同じ印象がこいつには漂っている？——

「ネロ、ねえ…名乗り返すのが礼儀か」

思考に入り浸っていた気もしたが、そこまで時間は経っていなかったようだ。

先ほどとさほど変わらぬ状況と風景が彼の目に飛び込んでくる。

唯一変わっているとすれば、件の少年が話しかけてきていることだ。その口調はあの紅コートの男に似ており、ますますイメージを重ねてしまいそうな気になる。

そして少年は軽く、それでいて静かに、

ネロにとっての爆弾発言を告げた。

「俺はレイン。魔剣士スパーダの末裔ってところだ。後この髪は地毛な」

—
What?

今この少年は何と言った？

スパイダの末裔？

たったそれだけの言葉に頭が混乱してきたネロは、とりあえず気を紛らわすために言葉を発することを試みた。

「お前…その言葉の意味がわかってて言ってるのか？」

「ああ、勿論。事情知らなけりゃこんなおとぎ話の英雄の話なんて此処で持ち出さないだろ？それに…」

あっけらかんとした調子で喋るレインと名乗った少年が、背中に何故かひっ付いている剣の柄を右手で持ち上げ、ネロにその鋭い切っ先を向ける。

「その口ぶり…あんたも事情を知ってそうだな？」

「…ハッ、どうかな？Jack pot（大当たり）とはいかない

かもしれないぜ？」

軽口と言い放つと同時に、ネロもレインと同様に背中に背負う片刃の長剣の柄を左手で握る。

【レッドクイーン】

かつてネロが所属していた魔剣教団が彼の為に開発した「紅き女王」。

銀色の光沢をもつ半端のない切れ味の刀身と、それを支える赤い柄は、

異名に恥じぬ無骨さと華美を醸し出している。

レッドクイーンの柄を握ったネロは、ある程度先刻の爆弾発言から落ち着きを取り戻していた。
そして自分もまた、少年に紅き女王の銀の剣先を向ける。

「さっきの末裔とかいう話は置いてやるよ。だが…」

紅き女王を握るまっすぐに伸ばした左腕が、切っ先を少し上へと動かす。

狙うのは、首

「お前は倒した方が手っ取り早そうだからな。…やらせてもらうぜ？」

ハッ、とレインが笑い、剣を構える。

が

「ギギイイイ！！！」

邪魔者が入った。

先ほどから隙を窺っていた2体のメガ・スケアクロウが、二人の動きが止まった為油断したと勘違いして襲撃を仕掛けたのだ。

その巨体に似合わない俊敏なダイブが二人をめがけて飛ぶ。その重量の為か空を切る音が少し大きく聞こえるほどだった。

「…てめえら」

二人の声が重なる。

「邪魔だあああ！！！」

それぞれの魔人級の威力の切り上げが、哀れな二つの影に直撃し、空高く吹き飛ばした。

二人の一撃がそれぞれ強すぎたためか、断末魔の悲鳴を上げることもなく

着地した二体のメガ・スケアクロウは荒野の地面に沈黙した。

「……………なあ」

「……………なんだよ?」

「…あのバカ共を灰に還してから勝負しねえか?」

「……乗った」

流石に今のレインの提案にはネロも同意した。

「多く狩った方が勝ちでいいこうぜ」

「フッ、自分の台詞で泣きを見るなよ？ kind」

ネロが言葉を言い終えた直後

ダ
ア
ア
ア
ア
ン
!!

「…まずは一匹」

「…ハハッ。イイね、そうこなくっちゃな！」

ネロのブルーローズの放った鉛に貫かれたアサルトが倒れるのと同じ時に、
右手にデッドファンングを握ったレインが異形の群れに突っ込む。

「H a a a a a a a ! ! !」

走った勢いに乗せて放つ強烈な突きが、一気に二体のスケアクロウを貫く。

偶然にもその剣の型は紅コートの男のそれによく似ていたのだが、本人は気付くことはできなかった。

串刺しにした敵の死骸の背後から、続けざまに三体のアサルトがレインに飛びかかる。

「B l a s t ! (吹っ 飛びな !)」

剣に刺さった二つのスケアクロウの死骸を遠心力と重量を利用して飛びかかってきたアサルトに投げつける。

一体だけ、数の関係で同類の死骸と激突せずに済んだが、

「足場のご準備ありがとう、ってか？」

それは一瞬のまぐれにすぎなかった。

空中で他の四体がそれぞれぶつかっているのを利用して、なんとレインは一瞬で敵を足場にして生き残ったアサルトの頭上に跳んだのだ。

そしてその身体は重力とともに空中で彼を見上げるアサルトの身体へと迫っていく。

「オラアアア!!」

ズジャアアアア！！！！

渾身の一撃

とてつもないスピードで振り下ろされた剣が、
落下するレインとアサルトの間を駆けける。

そのまま地面へと激突し、大きな砂埃が舞う。

悪魔の肉体を切り裂いたことによって、また血しぶきで彼の銀髪が
赤く彩られる。

「h a 他愛ねえな！」

その言葉を言い終わるか終わらないかのうちに、一瞬で彼の背後に肉薄した二体のスケアクロウが砂埃から飛び出しレインめがけて刃を振りおろす。

「甘いぜ！」

バク宙の要領で跳ぶ。

それは背後の悪魔達の上を跳躍し、更にその背に降りたった。

「You're grounded (オネンネしてな!)」

真一文字の切り払いが振り向いた二体の異形の身体を両断する。

デッドフアングを背中に戻し、少し考えてみる。

(以前より体が軽い…それに今のバク宙も小さなジャンプしてるのと大差なかったな)

覚醒し魔人となったレインにとって、やはりこの程度の運動は屁でもなかった。

なにより――

(…おもしれえ！)

悪魔達と戦うのに十分すぎる身体

それは今の彼のテンションをMAXにするのは容易だった。

ふと前を見れば、残った二体のうち一体のメガ・スケアクロウがこちらに向かってきている。

その全身には闘志満々といった多くの刃が付けられている。

「ハハッ、面白くなってきやがった！」

再び背中のでッドファングの柄に手をかけて、眼前の悪魔めがけて走り出す。

その軽い動きは、どことなく狼を思わせる俊敏さだった。

「I'm absolutely crazy about it!
！（楽しすぎて狂っちまいそうだ！）」

魔人の歓喜の咆哮が、荒野に響き渡る――

ダン！ダン！

二発の銃声とともに風穴の空いたスケアクロウが地面に倒れ落ちる。

「Not so fast…（焦るなよ…）」

まだ硝煙を上げるブルーローズを握る右腕が、これでもかと言わんばかりに疼き、光を発している。
彼の得意とする神業クイックリロードで残弾のない六連装カートリッジを投げ捨てる。

「やっぱり数が多いな…弾の無駄だ」

ブルーローズを腰のベルトに付けたホルスターに素早くしまい、悪魔の右腕を前に突き出す。

まるで勝利宣言をするかのように、ニヒルな笑みを浮かべているネ

口の口から言葉が放たれた。

「こいよ、素手の喧嘩ストリートファイトでやってやるぜ」

右腕の握りこぶしの中から、上に向けて中指を突きだす。

その挑発に激昂した悪魔が雄叫びをあげて一斉にネロに跳びかかる。

「ギギイイイ！！！」

最初に跳躍したスケアクロウの腕の鎌が、ネロの身体に売れるかと思われた瞬間――

「ギアアアア！?!?!」

悪魔の右腕が、案山子悪魔の頭を掴んだ。

「Be gone…（邪魔だ…）」

頭部を鷲掴みにされ、ただ身体を動かしてもがくことしかできない異形。

本当ならばここで腕の鎌を振ればネロを攻撃できるのだが、混乱している悪魔にそんな考えは到底思いつくはずもなかった。

そしてそれも計算に入れていたネロは、悪魔を掴んでいる右手を大きく振りかぶり――

「C a t c h t h i s !」

――
投げる

ぶん投げたスケアクロウは後方のアサルトに当たった。
直撃した瞬間にスケアクロウの鎌が刺さったのか、アサルトの断末魔の叫びが響く。

「H a a a a a a a a ! ! !」

また襲撃してくるスケアクロウめがけて、自慢の俊足で駆け抜ける。

そして

「Blast off! (消えろ!)」

——思いっきり、殴る！

ドゴオツツツ！！

鈍い音が大きな血しぶきとともに生じる。

スツ、と体勢を整えたネロが、萎縮している悪魔たちを尻目に血のついた右手を軽く払う。

「…H a パーティはこれからだぜ？」

その様子は、狩りを楽しむ狼のようで――

「Time to rock!」(ロックの時間だ!)

今、魔と化した二匹の狼が

荒野のパーティで唸り上げる!

長い…

レイン「読者が読みにくいだろうが」(スパン

おふう！

ま、まあなんとか出来上がったから褒めてくれ…

レイン「いや、だって今回までかかった時間が多すぎる」

そ…んな…(ガク

はいじゃ次回予告いってみよー

驚異的な強さで悪魔を全滅させたネロとレイン

そして二人は再び闘いを始める。

魔人VS魔人の死闘が始まる！

次回「蒼と漆黒」

Story 06 蒼と漆黒 〈Brack feather〉(前書き)

こんばんは、高校説明会で一人だけ私服(他全員それぞれの学校の制服)で、

会場でも家でもorzってたクレドですw

今回はレインとネロのレッツロック!なのですが、
先程今年20になる大学生の姉が酒に酔いまして…

ええ、皆さまの予想通り

泥酔した姉に酒飲まされました吐きそう

→すみません変な文が混ざりましたね

今回も戦闘描写です

感想・ご意見・アドバイス・批評なんでもお待ちしております

それでは第六話、ショウタイムだ!

Story 06 蒼と漆黒 (Brack feather)

「ギギオオオオオオオ!!!」

「まったく、悪魔さんは近所迷惑な野郎みてえだな!」

走りながらの悪態が、銀髪の少年の口から洩れる。

彼の眼前には荒野の中でもひととき目立つ丸い巨体と、多数の大ぶ
りな刃物を身に付けた悪魔——メガ・スケアク
ロウが大音量の咆哮をあげていた。

これと同じ種類の奴がもう一匹いたが、あのネロと名乗った男に任せればいいだろう。

意外と人任せなことを考えながらその俊足でメガ・スケアクロウとの距離を縮めていく銀髪の少年――――レインは、その方咆哮に揺さぶられた耳がジンジンとしているのを感じた。

その感覚と同時に視界に意識を集中すると、

既に自分と丸い異形の間は10メートル足らずとなっている。

跳ぶ距離としては彼の運動神経にかかれば十分安定して目標にたどり着けるのだが、

彼が己の攻撃範囲に入ったと認識した悪魔がそれを許すはずがなかった。

「チッ!!」

メガ・スケアクロウが刀身の長い三つの鎌のついた右腕を振るう。
刃の切っ先はちょうどレインの頭を捉える位置にかなりの速さで近づいていった。

このまま目的の異形に接近すれば、頭があのかの切っ先に持っていけることは明白だ。

だが――

「見え見えだぜ、っと！」

走っていた勢いに乗せて、刃の届く位置から少し前側で跳ぶ。

走る勢いを抑えつつ跳んだレインの足元を鎌の切っ先が肉薄する。
タイミングよく通り過ぎようとしている鎌の刀身を踏み台にし、もう一回。

「ラァッ！！！」

今度は足に力を込めて鎌の刀身を蹴り、異形のドテツ腹に突進した。そして移動する一瞬の間に背中から外したデッドフアングで空中袈裟切りを放つ。

「ギギユイ!?!」

奇怪な呻き声とともに、メガ・スケアクロウの巨体が後方へと勢いよく吹き飛ぶ。

「そのまま吹きとんじまいな! って…マジかよ」

刃物をブレーキ代わりに自身の巨体を易々と止めるメガ・スケアクロウが、移動を停止させた己の両腕から回転する2対の斧をレイン目掛けて

投げ飛ばす。

空気を切り裂く音が斧の回転の速さを示しているのに気付いたレインは咄嗟にバク宙でそれを回避するも、彼の着地と同時に間髪をいれずにメガ・スケアクロウが攻撃のモーションに入っていた。

チイツ！

「休む暇もねえつか！？」

鎌を付けた両手を大きく広げながら跳びかかる巨体の悪魔。咄嗟にデッドフアングを構えアーチ状の刃物の切っ先をガードする。

ギイイーン！！

金属と金属がぶつかり合う音が生じると同時に、
踵で砂利を削りながらレインの身体が後方へ押し飛ばされる。

体勢の安定しない回避直後だった彼にとって必然的にタックルとい
っても過言ではない攻撃をかまされたのだ。
寧ろよく防御をしっかりとれたと言っべきだろう。

バランスを取る為に地につけていた掌を離し、
デッドフアングを右逆手に持ちかえる。

「いつちよやってみるか……」

そう呟くとスツと目を瞑り、その構えのままその場で動きを止める

「ギギオオオオオオオ！！！」

それを隙と見たのかメガ・スケアクロウが咆哮をあげて再度両手の鎌を振り回す。

大振りの鎌の先がレインの頭を捉えるかと思われた――

――その時だった。

「D e a t h c r o s s
」

の体を通り抜けた

黒き十字架が、メガ・スケアクロウ

「ギギヤ?」

素っ頓狂な声を最後に、デッドファンクに斬られたその巨体が徐々に徐々にずれ始めていく。

ズシャアアアアアアアアア！！！！

血に横たわった悪魔の巨体が4つに割れて、荒地に鮮血の噴水を作り上げた。

剣についた血を払い、乾いた黒い血に染りかけている己の銀髪に指先を向かわせる。

戻した指先についたまだ僅かに残っていた黒い血を見て、彼はかつたるそうに溜息をついた。

「成功したはいいものの…これじゃ後でシャワー行き確定じゃねえか」

くだらない——いや、彼の髪の状態を考えれば当たり前
と言えることを呟き、
レインは先ほど成功した己の力の解放を思い返す。

黒き刀身——

己に流れる魔力を具現化してデッドフアングを強化したのだ。
それを一から始めて成功させたのは流石彼の戦闘センスと頭脳とい
ったところか。

しかし、自分に流れる魔力の色がまさか漆黒だとは思ってもよらな
かった。

あの太刀筋によって作られた黒い十字架（D e a t h c r o s s）
の切れ味を思い出してみても、
どう考えても彼の予想を上回る強化を成し遂げていたようだ。

「これが俺の色、ねえ」

呟きながら、改めて先ほど指先についた黒い血を眺める。
己に流れる血は、これより黒い――

《我――天――り》

「ああ？」

声？

人語の断片が、突然彼の脳内に響いた。

幻聴か？

《我——忌まわしき封印を解き——》

やはり聞こえる

しかもまだ何か言葉を続けようとしている。

だが、それっきり言葉が発せられる気配はなかった。

「なんだってんだ……？」

チツと軽い舌打ちをして構えていたデッドフアングを背中に戻す。
最早手なれた手つきで背中に剣を背負うそれは傍から見ればかなり
様になっていた。

先ほどの声は一体なんだったのか？

当然の疑念がレインの頭をくすぐる。

幻聴だとしたら俺はおかしいのだろう。主に頭と耳が。

悪魔の声？ここに喋ることのできる上級悪魔はいない

だとしたら――

ドオオオオオオン！！！！

彼の後ろで爆発音とも衝撃音ともとれる音が轟く。

頭の中に残るモヤモヤをうっとおしく思いながら、ゆっくりと体ごと後ろを振り向いた。

「……h a ーこりゃまたぶっ飛んだ光景だな」

思わず口からそう出てしまった。

当然だろう。

あの巨体を地に叩きつけたのだと思われる青い腕と、
その持ち主である先ほどの男――ネロが、メガ・ス
ケアクロウにブルーローズを突き付けていたのだから。

「Show down…（終わりだ）」

ネロの呟きと同時にブルーローズの銃口と、紅の外殻を纏う青の右
腕に紫の光が走る。

レインはあれが魔力によってできた光だと感じ、その様子に注意深
く目を向けた。

ダ
ア
ア
ア
ン
！
！
！

荒野に独特の銃声が響く。

「ギ
イ
イ
イ
イ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
！
！
！
！」

そののすぐ後に続いて大音量の悪魔の断末魔がネロとレインの鼓膜を揺さぶる。

だがその悲鳴はすぐに収まり、声の主だった悪魔ももう動くことはなかった。

「…スプラッタが好きなのか？」

レインが両耳を手で塞いでさも五月蠅いという表情と軽口をネロに向ける。

ネロはガンスピンをしながら腰のホルスターにブルーローズをしまい、レインに顔を向けた。

「お前が言えるのかよ？あそこのグロテスクな肉塊は何処の誰がやつたんだかなあ？」

「さあな、覚えがない」

ククツ、と二人ともニヒルに笑いながらお互いの距離を歩いて（・・）縮めていく。

最初に悪魔に出くわした位置からどれほど移動したのだろうか。ふと見ればすぐそこにはつい先ほどまで無かった小屋と岩場がある。

ザッ、ザッ…

二人が丁度真横をすれ違い、軽く背中を合わせる状態になった。

そして、小屋に掛けられていた看板が地面に落ちた次の瞬間――

ギィィィィィン……！！

激戦の火蓋が、切って落とされた

振り向きざまに右に繰り出したネロの斬り上げと、
それに接触する形で出たレインの袈裟切りがぶつかり合う。

ギチチッ！

お互いに魔人故のあり得ない腕力を持っているため、
拮抗したその鏑迫り合いを繰り広げている刃と刃の間では火花が飛び散っていた。

「そのイカした右腕——俺に斬られても後悔するなよ？」

「H u n やつてみな、k i d」

ズザザッ！

互いにバックステップで距離を取り、ギチギチと音を鳴らしていたデッドファンングとレッドクイーンが離れる。

キン！

威嚇半分本気半分であろうブルーローズの銃撃がレインの眉間に向かっていく。
デッドファンングの樋でそれを防ぎ、独特の金属音がレインの耳に入る。

防御のため必然的に視界を塞ぐことになったデッドファンングを構えなおすが、

既に眼の前にはネロが左腕に握った紅の女王の刃が迫っていた。

「チイツー!!」

「B l a s t ! (吹 っ 飛 び な !) 」

ギイイイン！

上段から振り下ろされたレッドクイーンを、神より授かりし長剣で弾く。
が、威力間で相殺しきれずこちらも弾かれてしまい、体勢をくじかれる。

「ハアッ！！」

「ぐつつ！！」

ギーン！ギーン！

レッドクイーンの刃が更に二回、レインの胴体に振り下ろされる。
ガードはしているものの不利な体勢に変わりないうえに、向こうの
方が勢いがあるのだ。

「ッ…！仕方ねえ…！」

ネロの四撃目になる攻撃が繰り返される――が

「Huh…？」

――その水平切りは虚空を切るだけだった。
それだけなら身体をずらされて回避されたととれるだろう。

だが、おかしい。

何故、身体ごと消えている？

「……つと、なんとか成功したみてえだな」

不意に後ろから声がした。

ネロがレッドクイーンを背中に戻しながらそちらを振り返る。

なんとそこには、先ほどの小屋の屋根に立っているレインの姿があった。

「エア・トリック…とても名付けるか」

そう

これこそ、彼の元居た世界に存在したもう一人のダンテの「スタイル」である。

レインはスタイルなど大まかな切り替えはできないが、記憶から掘り出した4つのスタイルの中の技を再現することができる。

それを彼流に改良したのがこの技である。

エア・トリックは足に魔力を込めることによって擬似的な瞬間移動が可能になる。

よく言えば高速移動と変幻自在のフックを持っているという
とだ。

一瞬で移動できたタネは、まさに彼特有の**トリック**なのだ。

「おいおい、これ結構お気に入りだったんだぜ？」

屋根の上でジャケットについた大量の埃を手ではたき落とすレインの姿を見て、

ネロはまた頭の中に何かが引っ掛かっていた。

（今の技…あの男に似ている？）

仕草、技、言動、容姿…服を気にするところも、自身の真つ赤なコ

トを気にして

冗談めかした言葉を言う彼に似ている。

どこをとってもあの男の姿と一致する。これほどもやもやした引っかかりはネロにとって

これ以上なくうっとおしい謎だった。

「——さて」

独特の真剣さを纏った声が、ネロの耳に入る。

そうだ。今は戦いの時間じゃないか。

狩るか狩られるか。

アイツが魔人の息子でも、あの男に似ているのも今は後回しだ。

そうだ。今は

「「ショウタイムだ」」

ギィィィン!!!!

二人の声と二人の獲物がぶつかり合う音が重なる。

レインの上段からの攻撃が、ネロの左手に握られたレッドクイーンを後方へ弾く。

ネロの胴体に隙ができたのを見逃さず斜め右上への切り上げを繰り返すが、

軽快なバク宙で回避され、デッドファングの刃は彼の紺のコートの端を掠ったただだった。

だが、効果はある。

バク宙後の着地の隙を狙い、レインが間髪をいれずに袈裟切りを放つ。

その攻撃は不利な体勢であるネロにとって手痛い点だ。

当然防ぎきれはるはずもないネロのレッドクイーンが上へはじき飛ばされ――

「YeeYhaaaaaaa!」

前方への高速の突き――スティングガーを繰り出す。
レイン自身、記憶をたどる前から知らず知らずのうちに使っていた型だ。

その貫通力と速度は想像を絶する。

ギン！

本来なら有り得るはずのない音とともに、二人を中心に衝撃の余波が周辺を襲う。

荒地の大量の乾いた砂埃が、円状に広がりながら舞いあがっていく。

しかし視界を奪われるその状況下でも、レインの目線はある物をジツと捉えていた。

砂埃の上からでも見える、靈気のような淡い青い光
己の握る剣の切っ先を防いだのであろう紅い甲殻

悪魔の右腕
デビルブリンガー

「やっぱ銃と剣だけじゃ無理か…」

次第に晴れてきた砂埃のすぐそこから、腕の主であるネロの姿が現れる。

デッドフアングの切っ先は確かに彼の右腕を捉えていた。
だが、鋭い刃は紅の外殻に阻まれ、ギチギチと音を鳴らしている。

「…どういつ仕掛けになってんだ？」

困ったように苦笑いを浮かべ、言葉を発するレイン。

「悪いが種明かしは——」

一旦言葉を切り、ネロの悪魔の右腕が一瞬にして防いでいたデッドファンクの刀身を握った。

刃を握っているのに傷すらつかないその右腕に力が入り——

「——してやれないな！」

——剣ごとレインを持ち上げる

「うおっ!？」

突然の予想外の出来事に思わず声をあげて驚いてしまつが、もっと予測できぬ事態がすぐに彼を襲う。

持ち上げられたと同時に上に投げられ、
デッドフアングを握ったままレインは中に放られ

「ハア!？」

——体を青い巨大な（・・・）手に驚掴みにされたのだ。
流石のレインもこればかりは驚愕するほかはなかった。

ふと見ると、ネロの右腕もこの腕と同じモーションをしている。
———
ということは

（この腕は本体と連動してやがるのか！）

なら———！

咄嗟に切っ先を向けたデッドフアングをネロの足元に投擲しようと
試みる。
が、すでにネロの攻撃はラストスパートを迎えていた。

「Catch———」

「チイッ！」

思いっきり振りかぶり

「——this！」

叩きつける！

ドゴオオオオオオオン！！！！

「があああっ！！」

とんでもない衝撃がレインの身体を襲い、彼の口から痛みによる叫び声が出る。

そしてその手から離れてしまったデッドファンクをデビルブリング
ーで叩き落とし、
その刃がレインの胴体突き刺さる。

「ぐっ…」

仰向けになったレインの様子は、どう見ても満身創痍で
死ぬ直前だと思えない姿だった。

剣先が突き刺さった腹からは大量の血が流れており、
身体は衝撃の余波で傷だらけで、こちらからも至る所から血が出て
いる。

――だが

「……Don't get so cocky！（ナメるな！）」

レインの大声と同時にネロに向かって黒い十字架が放たれる。

「ッ！！」

咄嗟にレッドクイーンでガードするが、飛ぶ斬撃の威力が強すぎたのか

ネロの体が後方へ押され、踵が荒野の砂利を大きく削った。

「あれぐらいじゃ倒れもしねえか…」

衝撃を耐えしのぎ、体勢を戻しながらネロが呟く。

その視線の先には血まみれでなおニヒルな笑みを浮かべ、鮮血に染まったデッドファンングを肩に担ぐレインの姿があった。

彼の中の悪魔の再生力にとって、剣で腹を貫かれた程度ならそれほ

どダメージは無い。

現に彼の体は血まみれだが、傷口や骨折箇所はすべて治癒している。

もつとも痛覚は正常なので正直痛いのだが。

「ああ、死の底から舞い戻ってきてやったぜ？」

「悪いがそんなしつこい奴との再会は望んでないな」

常軌を逸脱した状態でなお、軽口を言い合う二人。

そんな会話の内容とは裏腹に、ネロは紅の女王の火炎のエンジン――

――イクシードを発動させ、レインは刀身を漆黒に変化させたデッドフアングを構える。

「ラアアアア！」

二人の咆哮が重なり、再び刃がぶつかり合う。
蒼と漆黒の閃光が激突し、再度余波が周囲を襲った

~~~~~  
~~~~~

ギイン！ ギイン！

ガガッ！

もう何合打ち合っただろう。

かなりの回数の剣戟を繰り広げたことは間違いないが、二人は息を荒げつつも笑みすら浮かべていた。

——面白い！

そう、ただ単純に戦いが楽しいのだ。

ネロは今までの手応えのない悪魔とは違う相手と戦うことができ、レインはかつてない力を使い強敵と戦いをくり広げられる。

二人にとってこれ程面白いことはなかった。

「H a a a a a a a a a a ! ! ! !」

「ッ
…！」

レインがネロの攻撃をスウエーで回避しつつ袈裟切りを入れる。
が、それも右腕で捌かれ再度バックステップで距離を取る。

「つく…！そろそろ本気で決着^{ケリ}付けねえと倒れそうだな」

失った血の量のせいか、足元の感覚がふらついているのをレインは
感じた。

別段死ぬわけでも気絶するわけでもないが、

このままいくと体が言うことをきかなくなる可能性が高い。

それに比べネロは攻撃を喰らったとはいえ衝撃を3、4回受けているだけのため、
傷だらけには変わらないが血は失っていない。

「ラアアアアア！」

全身を魔力強化するため、レインは黒い魔力を纏うが

「ツツツがああああああ！？」

瞬間、彼の頭を想像を絶する痛みが襲った。

魔力使用による疲労でも、戦闘の痛みでもない。
地面に倒れ、頭を押さえながら叫ぶが、痛みは一向に収まる気配は
なかった。

——これ、はっ！？

《我——忌まわしき封印を解き——》

またあの声が脳内に響く。
激痛の中でその声だけが何故かはつきりと聞こえていた。

《我——再び現世に舞い降り——》

段々と視界が薄く、暗くなっていく。
ぼやけた映像に映るネロは、何故かレインではない方に警戒の視線を向けていた。

が、もうそれを疑問に思う間もなく、レインの意識は

《我
——
我こそ、真の＜天使＞なり》

——
その声と同時に、闇へと堕ちていった。

夜8時に更新すると言っておいてこの時間帯…

レイン「有罪だな」(チャキ

え? ちょwおま何を (ry

ザシュ!

レイン「…っと、何かアドバイスや意見があれば遠慮なく感想を書いてくれ

さて、次回予告行くぜ」

次回予告

謎の声に襲われ倒れたレイン
一方神の間では、世界神がレインと同じく空間に消されたもう一人の人間を保護していた。

それはなんと、レインが世界に転移する直前に記憶から消されていた、
た、

彼の愛すべき人間だった

消された記憶が甦るとき、運命は大きく変化する

次回「幕間 神の間にて」

マジで更新遅くて申し訳ありません!!!

スライディング土下座で登場させていただきますクレドです。

今回はイミフ回かも知れません。

私の文章力の無さがにじみ出てます申し訳ないm(_ _)m

あ、それと今回はBGMを使います
もしよかつたら聞いてください

使用曲 Knight's of the Holy Spear

URL記載は楽曲についてのガイドラインに違反する可能性があるため、

ユーチューブにて検索しスタンバイをお願いします
申し訳ありません(2011年12月14日)

【↑の合図があるまで聞いてはいけませんよ？

それでは第七話、開幕いたします

人を邪道に引つ張り込むため、暗闇の手下共が真実を言うことがある

わずかのまことで引っ張り込んでおいて深刻な結果で裏切るために

『マクベス』より

ここは、どこだろう？

目の前が、とても澄んだ蒼色で埋まってる

きれい

素直にそう感じた

その感想が口を衝いて出そうだった

けれど、何故か言葉が出ない

唇も動いてないみたい

あれ？

そういえば、私は、誰、なんだろう？

この景色を綺麗と感ずることが出来るこの私は

でも、あの人のことを思い出すとすごく安心できる

私が初めて出会った、素直な気持ちで話ができる人
私が傷ついた時も、悩んでいた時も、いつも必ず助けてくれた人
血は繋がってないけれど、私の家族のような人

そう、あの人は

私の昔からの幼馴染で
私のかげがえのない友達で
私の兄さんって言える人で、
私の――

私の大好きな、煉兄さん

【異世界 神の間】

「またまた難儀な種を拾ってしまったかものう……」

無

この世界を表現するとしたら、その一文字が妥当だろう。
限りなく続く白い背景。どこが始点で、どこが終点かすらわからない。

そんな透明な存在と言える世界の中に、空間を支配する老人——
——もとい世界神は、深い溜息をつきながら一人そんなことを
ぼやいていた。

見かけは白いローブらしきものを着た背の低い老人だが、その実際の姿は空間や世界を司る神の一人である。

人は見掛けによらないというが、まさにこのことだろう。

老人が半ば呆れたような苦笑いを浮かべながら言葉を続けた。

「あの血族はどこまで広く影響を及ぼすのやら…やはり運命とは量り知れんな」

魔剣士の子孫たちがここまで事を起こすのは神にも予想はできていなかった。

唯一神が知ることすらできない、運命という領域。

改めてその存在感を思い知ったな、と老人は溜息交じりに肩を竦めた。

北上煉 新たな名を「レイン」

魔剣士の末裔

肩書きだけなら九文字で終わるちっぽけなものだ。

しかしその存在が行ったことは天変地異に等しき大事である。最高位の神であるこの世界神すら平然と巻き込む事態を、当事者の

彼は無意識に行っている。

無知は恥じるものではなく、罪なのではないか？などとも思えてしまっ。

だが、今回世界神が抱えている問題はそれ以上かもしれない。

しかもその難題がレインが今居る世界に干渉しかねないとしたら、更なる大きな事態を引き起こす可能性はほぼ100%だ。己が役割を果たすなら、この危険因子とも呼べる存在を此処に留めさせておくべきなのだが――

「問題は、それが暴れているということなんじゃよなあ……」

そう、今老人が壊れかけの世界で見つけた「種」は、無意識のまま己に眠るある力を行使し神の間から脱出を試みたのだが、抵抗もあえなく現在は世界神によって別の虚無空間に閉じ込められた。

一見空間に天使の力を閉じ込めることが簡単そうに見えるが、実際はそう易々といくことは無い。

この神の間はあらゆる世界の狭間に顕在する唯一の虚無空間だ。

下手に暴れられて時空に穴を作られれば、

本来交わることのない並行世界が衝突する可能性すらある。

ということとは、強力な天使の力をまるごと抑え込む空間操作が必要となる。

その為か、老人は体力は消耗していないものの気疲れが溜まり、デリケートな作業を終えて先ほどのような深い溜息を漏らしていたのだ。

老人が再び溜息を吐きかけた時

ドゴオオオオオオッ！！！！

突如終わりの無い白い背景を二つの衝撃が襲った。
爆発音にも似たその音が無限に広がる空間に大きく響き渡る。

それと同時に衝撃が生じた二つの場所から、
純白の羽を纏う——巨大な二本の腕が出現した。

「……断罪封印でも止められないか……」

老人が空間を突き破って肘あたりまで出現し始めた何か（・・・）の
両腕を厳しい目で見つめる。

そして視線をずらさないままパチンと指鳴らし（スナップ）をする。

ギチチチチチチッ！！！！

指鳴らしの音とともに既に二の腕まで出現し始めた腕を巨大な水晶
が覆った。

大きさでは純白の腕に劣らない蒼い結晶が腕の動きを制止させる。

一見すれば効果が出たかのように見えるだろう。
だが警戒の色を浮かべた老人の視線は、
ブレることなく半透明の結晶に覆われた圧倒的な大きさを誇る二本
の腕へと向いていた。

（この程度で止められるほど弱いものではない…では、そろそろ本
体が…？）

そして、彼の頭に渦巻いていた予想は的中する。

《……滅せよ、私の眼前の障害を》

「……来おったか！」

【BGM：ペルソナ2 罪より
Knights of the
Holy Spear】

現れたのは、純白の翼を背に付けた少女

その翼と瞳の色を除けば、彼女は普通の女の子に見えるだろう

15歳かそこの幼さの残った整った顔立ちに、

漆黒のショートヘアと白い学生服を身につけている。

だが、鮮血を思わせる紅い双眸は彼女の自我を感じさせない冷たい殺気と淡い光を放っていた。

スポットライトの無い見開かれた瞳が老人へと向けられ、

先ほど出現した巨大な腕が彼女の両脇に浮遊する形で素早く移動する。

そして、攻撃が始まった。

《…行け、幻影剣》

聞くのは二回目になる透き通った女声と同時に、少女が無表情のまま右手を老人に向けてスツと彼の体を指で指し示す。

それと同時に少女の翼から数十片に及ぶ純白の羽が放出され、宙に舞う全ての羽が一瞬で白い剣に姿を変えた。

殺意を露わにした剣の切っ先が一斉に老人の立つ方向へ向けられ、放たれる。

「流石、バージルの末裔だけはあるようじゃな。

幻影剣を天使の力で構築し操るとは、なんとも奇想天外じゃ」

いくら剣との間合いが長いから、と言っても少々呑気すぎではないかと思えるほどにゆったりした口調で老人が言葉を並べていく。既に音速の域に達しかけている刃が向かってきているというのに、だ。

ギギギギギッ！

幾重にも重なる金属音が少女と老人の間合いで生じた。

見えない壁に当たった全ての純白の剣が、回転しながら無地の背景を担う白い地面へ深く突き刺さる。

重なり合う金属音がまるで戦闘の序曲を彩るかのように無音の世界に響き渡る。

少女の視線が弾かれて地面に突き刺さった数重もの幻影剣へ移り、僅かに右に首を傾げる。

何の表情もない綺麗な顔が少しばかりこの現象を不思議がっている様にも見えた。

「絶界術式じゃよ。攻撃を防ぐ絶対防御術式じゃ」

マジックの種明かしとでも言うように老人が面白げな表情で話しかける。

能力の本質を明かすのは戦闘において不利になることが大多数だ。だが老人の顔は余裕を保っている。

少女――もしくはその中の存在が

わざとらしい老人の挑発的な表情や言動を無視し、新たな攻撃命令を下した。

――排除を優先する――

女声を合図に少女の両脇に控えていた二本の腕が拳を作り、先ほどの刃を上回るスピードで老人の立つ地点に渾身のパンチを繰り出す。

「天使の両腕か……だが、結果は同じじゃよ」
アンジェロプリンガー

絶対防御術式がある限り、特定の攻撃でないと障壁を破るのは不可

能に等しい。

そもそも天使と言う存在は神に仕える者でもある。

サヴァントマスター
下僕が主に勝つ方法など無い。

この攻撃と防御は互いの立場と格差を露わしていると言ってもいいだろう。

ドゴオオオッ！！

轟音とともに老人の目の前に迫っていた二つの拳が障壁に阻まれる。とてつもない力と絶対的な結界が時空を捻じ曲げんとばかりに互いに唸り、音という咆哮をあげる。

だが、依然として結界は崩れるどころか湾曲した部分さえ見せず、二連の拳の勢いを確実に弱めていった。

その様子を見て、このまま暴れさせずに抑え込もうと老人が封印術の詠唱を始めようとした

が

「ぬおっ！」

二本の剛腕が突如として大量の白い羽と化して広範囲に離散したのだ。

羽で視界を塞がれた老人が、思わず驚嘆の声をあげた。

刹那、全ての羽が先ほど同じように純白の長剣へと姿を変える。

「ちいっ！わしとしたことが油断しすぎだったか！」

苛立ちの舌打ちが老人の口から漏れ、再び障壁が刃を弾く。

彼の焦りの原因は戦闘の状況ではない。

一瞬でも少女から目を離したこと（・・・・・・・・・・・・・・・・）だ。

本物の天使の力があればテメンゲニルほどの大きさまでは行かずとも一瞬で魔界への穴を作ることなど児戯に等しい。
今ここで、あの少女に魔界へと逃げられてしまつては時空が乱れて多数の世界が狂う恐れがある。

老人が急いで少女の居た地点へと視線をやるが――

「……………遅かつたか」

少女は影も形も無くなっていた。
地面に落ちた大量の白き幻影剣が、次々と硝子の様に儚く割れていく。

恐らく、主がもうこの場に居ないからだろう。

「……………仕方がない、各世界の現状を監視せねばならぬな」

そう呟くと、老人が虚空から杖を取り出し詠唱を始めた。
それと同時に人の形をした影が老人の前に跪く形で出現する。

「御呼びでしょうか」

影が男声とも女声ともとれる声で老人に話しかける。

「うむ、世界の構築システムを安全領域で保つよう監視してくれ」

「では、先ほどの天使が逃げた先は…」

「…」

老人が黙り込む。
だがそれは一瞬の沈黙にすぎなかった。

「…警戒対象をあの天使の力を持つ娘…秋宮 涙へと設定する。」

「承知しました。詳細情報は如何なさいますか？」

「……彼女が逃げたのは、北上 煉————もといレインの存在する世界じゃ」

「……確かにオーダーを承りました」

そう告げると、影はその僅かな形も残さずふっと消えてしまった。

残された老人が、一人呟く。

「……………かつての幼馴染であり、遠い血族の中である二人……
そしてその二人が同じ世界、同じ時の中で崩壊に出会い、

それぞれの力を覚醒させた…

北上煉は崩壊によって彼女に関する記憶を失い、

秋宮涙も彼の記憶をなくしてしまった…

しかし再び違う世界での再会を所望する、か…

齒車はもうわしらには止められんのかもしれんな…」

この出来事が後の物語にどう繋がっていくのか

それは、神すら知るよしのない話である

レイン「うん、イミフ」

ごめん…m (ー ー) m

今回はちょっとこれからの物語の核心に触れる部分なので詳しく説明ができないところが多かったんよ…

じ、次回予告行くぜい…

不思議な夢を見たレインが目を覚ますと、

そこにはなんと先程まで自分が戦っていたネ口の姿があった

そしてネ口は彼に質問を投げかけ――

次回「城塞都市フォルトウナ」

LIBRARY 〱オリジナルキャラ設定紹介〱（前書き）

私の好きなアニメ・ゲームキャラTOP3

一位 ダンテ

二位 デッドプール

三位 アーカード

っと、無駄話はこの辺にして

どうも、クレドです¥（^^）

今回はオリキャラの設定紹介です

今後の本編ではこの回を見てないとわからない部分もあるかと思いますが、

作者の立場としては今回はネタバレ有無関係なく読むの推奨です

無理強いはしません

それじゃ、いってみよう！

LIBRARY 〱オリジナルキャラ設定紹介〱

オリジナルキャラ

レイン 本名：北上^{きたがみ} 煉^{れん}

性別：男性

年齢：18歳

身長：189・4cm

体重：61・2kg

瞳の色：蒼（覚醒によって変化したため）

髪の色：純粋な銀

好きなもの：チョコパフェ 戦闘

嫌いなもの：煙草 口数の多い人間 疑問

イメージCV：岡本信彦

（「とある魔術の禁書目録」一方通行役

「青の祓魔師」奥村 燐役 その他）

イメージソング：Disappear（Bullet Form
y Valentine）

容姿：

全体的に整った顔立ちで、純粋な銀色の髪。

髪型はDMC3のダンテのようにストレートにしている。
長さは肩にかかる程度。

性格：

クールな性格で軽口や皮肉を口にすることが多い。
強い責任感と精神を持ち合わせているが、時に繊細な部分を見せる。
恋愛に興味がなく、それ故人の好意に鈍い。
戦闘ではひどく好戦的な一面を見せ、戦いの中のスリルを楽しんでいる。

頭脳：

元都内トップクラスの高校に満点で合格。
しかし目立つのが嫌なので二位に首席挨拶を受け渡し入学する。
言語力や戦略性・理解力の高さは常軌を逸している。
また多方面において博学でもあるが本人が自らそれを口にする
ことは無い。
六ヶ国語やそれ以外の言語をいくつかマスターしている。

人間関係：

基本的に人と話すことを面倒くさがり、
学校では幼馴染であり同じく世界の崩壊によって覚醒した秋宮 涙、
その他数人の友人のみ話していた。

幼少時に

「自分が銀髪だから自分の周りにいる人間も奇異な目で見られてしまう」と

思い他人を傷つけないようにと人付き合いを拒む傾向があった。

血縁：

並行世界側のスパイダ及びダンテの子孫で、何代目に当たるかは不明
また何故この家系が日本に来たのかも全て不明である。

秋宮涙とは遠い血縁だが、本人たちを含め親族はそのことを知らない。

覚醒：

魔剣士の「悪魔」の部分をレインが受け継いだもの。

ダンテが己の息子に封じた「悪魔の力」が、

代々誰にも知られずに受け継がれてきたものと思われる。

覚醒する条件としては血族の血と悪魔を受け入れる魂が必要になり、
この能力の枷を付けたのは並行世界のダンテである。

レインの場合覚醒した後は身体の構成が半人半魔になり

常人では計り知れない再生力と身体能力、そして今まで以上の運動
能力を得た。

罪：

元居た世界の崩壊の原因が自分である為か、

「意思や経緯などではなく、

自分があの世界に居たすべての人々の未来を奪ったことは変わりが
ない」

としており、新しい世界へと移り生きて罪を償うことを決意する。

しかし未だに後悔や懺悔が頭を渦巻いており、

本人に自覚は無いが荒地に居た時はかなり精神が弱っていた。

秋宮涙との関係：

小さいころからの幼馴染で、秋宮涙からは「兄さん」と呼ばれ親しまれていた。

レインにとって秋宮涙は「護るべき大切な存在」であると意識している。

しかし恋愛関係に鈍いため彼女に好かれていることを彼は知らない。

世界の崩壊の中でお互いに能力が覚醒し共鳴したためか、

力を得た反動でショック症状を起こし彼女のことを忘れている。

その為作中において彼が彼女の事を覚えてないので1〜6話まで秋宮涙に関する描写は一切されていない。

戦闘技能：

元居た世界でさまざまな武術や射撃訓練を経験したため多彩な戦闘スキルを兼ね備えている。

主に扱うものは剣と銃だが日本刀などの扱いも得意である。

装備

デッドファンゲ：

世界神より授かった両刃の長剣。

長い刀身と龍の紋章が彫られた無骨なグリップ等、リベリオンやフォースエッジを連想させる部分がある。

持ち主の魔力を取り込み、刀身の切れ味や硬度に返還させる能力を

持つ。

また、その時取り込んだ魔力の色を刀身に具現化させる。
レインの場合は漆黒だが、ダンテの場合は…？

技設定

Death cross（死の十字架）：

デッドフアングを使った強力な二連斬撃。

十字の形に二回連続の斬撃を繰り出し、眼前の敵を斬る技である。

一瞬の太刀筋は常人では肉眼での確認は不可能。

また、刀身が魔力強化され漆黒と化したデッドフアングでこの技を使うと太刀筋の残像が黒い十字架に見える。

エア・トリック：

脚部を魔力強化し擬似的な瞬間移動を行う技。

元々は並行世界側のダンテのスタイルの一つで、その移動力は広範囲にわたって有効である。

デアフリンガー：

全身に悪魔の鎧を身につける技。

魔力で生成された漆黒の鎧は並行世界側のダンテのスタイルと同じもので、防御力・耐久力ともに申し分ない。

?????

レインの中に眠る何か(・・)

意思があるようで、自らを天使と称する

秋宮 涙

性別：女性

年齢：15歳

身長：168・4cm

体重：不明

瞳の色：真紅

髪の色：黒

好きなもの：アイス 運動

嫌いなもの：ネズミ

イメージCV：井上麻里奈

（「ペルソナ3 ポータブル」 主人公役

「学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE

DEAD」

宮本 麗役 他）

容姿：

所謂美少女というもので、細い体型と端正な顔立ちを持つ。

日本人らしい綺麗な黒髪をショートヘアにしている。

胸はBとCの間くらい。おっと誰か来たようだ。

性格：

温厚で優しい性格をしており、誰にでも分け隔てなく接する性分。

天然な部分があり曲がったことが許せない。

顔立ちがとても整っている為か告白されたことは何回もあるが、

本人は幼馴染で優しい兄のような存在である北上煉に片思い中の為彼女に思いを伝えた男子はことごとく撃沈している。

謙虚な態度の為自分の可憐さを知りえていない。

レイン（北上 煉）との関係：

レインとは幼いころからの親友であり、彼女が片思い真つ最中の関係である。

彼を兄のように慕っており、懐き様は周りからは本物の兄弟と間違

われるほど。

世界の崩壊の中強制的な共鳴の為レインの記憶をなくしていたが、潜在意識によって神の間で再び覚醒する。

上記でも述べたが、

1～6話ではレインの記憶からも消えていたので彼女に関する描写は一切されていない。

能力：

運動神経が良く、彼女の通う中学校ではよく部活の助っ人として頼られていた。

運動神経の高さは悪魔の血を受け継いだ部分が影響している。

彼女の先祖の名残か、天使の力を体に潜めている。

レインと違い此方は魂の枷ではなく血縁の潜在能力である。

悪魔の力に比べ全体のパワーの割合を大幅に占めており、

幻影剣などが天使側の技として使用される結果となった。

世界の崩壊に伴って防衛本能によって天使の力が覚醒している。

力を使うときは背中に巨大な純白の羽が出現する。

血族：

並行世界のバージルの末裔に当たる血縁。

こちらも北上煉と同じくどこから日本に入ってきたのかは不明。

バージルが力を求めた名残か、この血筋には天使の魔力が宿っている。

その後：

天使の力を行使し神の間から抜け出した彼女は、

自分の兄のような存在であるレインの居る世界へと向かう。

世界に干渉し再度共鳴した為、レインにも彼女の記憶が蘇り…？

技設定

幻影剣：

並行世界側のバージルが使っていた技。

天使の力によって構築されており、純白の長剣を放つ技。

彼女の翼から放出された魔力の籠った羽根が剣へと姿を変えて放たれる。

同時に複数の剣を出現させることも可能で、役目を終えた後は硝子の様に砕け散る。

彼女の先祖であるバージルは蒼い幻影剣を使っていた。

世界神

空間および世界を司る神。

絶対防御術式や封印結界などの生成を得意としており、その力は絶大な為最高位の神とされている。

普段は白いローブを着た老人の姿をしているが、時と場合によって姿や声を変えて出現する。

世界の崩壊の中時空にのみ込まれかけたレインと秋宮涙を救い、それぞれの運命の先を見届けようとしている。

此処だけの話オリ主転生に関わっているという噂も…

LIBRARY 〱オリジナルキャラ設定紹介〱（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想にてご意見・改善点・アドバイスの記述をお待ちしております

ちなみに次回予告は前回と同じです

それではまたお会いしましょう

クリスマス特別編 〓 座談会〓

作者&涙

「「メリークリスマス!」」(クラッカー炸裂

レイン

「サンタは世界の子供たちの家に不法侵入してると思う」

Xmas特別企画 『Devil Dead Night 座談会
!』

作者

「と、いうわけで!わ〓どどんぱぱぱ」

レイン

「これまたなんとも言えねえ企画を持ちだしてきたな」

涙

「というか更新遅くて本編では私が暴れてる描写しか出てないし…」

作者

「誠に申し訳ございませんでした涙様（ドゲザ）」

涙

「そ、そうまでしなくてもいいよ!？」

あ、自己紹介しなきゃ!えっと…」

レイン

「無理に捻り出さなくていいぞ。

お前いつだったか自己紹介で思いつきり噛んでダルマ並に顔真っ赤にしてたろ」

涙

「な、ななな／＼／今更そんなこと掘り出さなくたっていいでしょ!?!／／／」

作者

「まあまあ、とりあえず簡潔でいいからやってちょ。

読者の皆様がデレてんじゃねーよとグダりますぞ」

涙

「えーと…秋宮涙です!

にいさ…レイン君の通っていた高校の一年生です!

並行世界のバージルさんの末裔?でいいのかな…」

まだ本編では天使状態でしか登場してませんけど、よろしくお願いしましゅ…あううう／＼／」

レイン

「やっぱな」

作者

「録音ソフト起動しといてよかった。さて今のを保存保存…」

グシャッ
（作者のPC破壊

涙

「あれ？すみません、間違ってPCに裏拳ぶつけちゃいました」
（闇の笑い

作者

「あ、ハ、ハイ…（（（…；…；。D（（（ガクブル」

レイン

（そついや涙は前に空手部の助っ人もやってたよな…
道理で力が強いわけだ）

涙

「兄さんもせつかくだし自己紹介やってよ！」

レイン

「俺もか？へいへい。

俺はレイン、本名は北上煉だ。

並行世界側のダンテの末裔にあたる血縁らしい。

涙とは幼馴染の仲だが…本編の俺はどうやら涙に関する記憶を無くしている。」

涙

「でも次回から少しずつ変化が現れる予定です！お楽しみに！」

~~~~~

作者

「さて、本題に入ろうか」

レイン

「まず何を話す予定だ？」

作者

「ああ、それは決めてある。  
まず最初の題は…こちら！」

1:「Devil Dead Night」を書き始めた理由

レイン

「理由か。ずいぶんと有りがちな方向性だな」

作者

「そう言っなよ。」

理由としてはやっぱり Devil May Cry に魅せられた、  
って言うのが初めに来るね」

涙

「確か作者さんは3からDMC始めたんだよね？」

作者

「そうそう。最初に店頭で見つけて一目惚れ（何）した」

レイン

「まあ理解できるな。」

パッケージ見て衝動買いしたと言われればなんとなく想像はつく」

作者

「で、第二の理由がこのサイトを半年前に知ったから」

涙

「なるほどー。」

「あれ？なんだかすごく一般的な回答だけど…ネタ大丈夫？」

作者

「大丈夫だ。問題無い」

2:「Devil Dead Night」執筆裏話

涙

「裏話？」

作者

「イエス。たぶんこの題は長くなるな」

レイン

「裏話と言うとメイキングみたいなモンか。」

作者

「ああ。だからちょっと二つに分けて話していくよ」

●1:オリジナルキャラ原案

作者

「ここではお二人が登場人物になるまでの原案をご説明するよん」

レイン

「紹介ねえ…嫌な予感がするぜ」

作者

「まずは…涙のモデルにした人物に来ていただきましょう！  
有名なこの人です！」

涙

「わ、わたし！？」

「というか段々テレビ番組チックになっちゃってるような気がする  
よ！」

レイン

「ん？どっかで見た顔だな…」

フェイト・テストロッサ

「あれ？なんだかこっちを見て騒いでる…行った方がいいのかな？」

レイン

「ちょっと待て作者」（銃口押しつけ

作者

「ナ、ナニカナー？」

レイン

「ここはちっぽけなDMC二次創作小説が行う座談会だよな」(グイグイ

作者

「ソ、ソウデスヨー？」

レイン

「じゃあ何故マジモンの有名な作品であるリリなの、それも主人公クラスに招待送るといふ果てしない迷惑行為してんだ？

三秒以内に答えなかったら喉笛に風穴開くぜ？」(チャキリ

作者

「いや、これには涙のモデルにさせていただいた(勝手に)人を呼んだだけで」

レイン

「You shall die」(BANG!!

レイン

「…さて、涙が感激してサインとかもらってるがまア気にしないで  
おっつ」

涙

「〜あれ？兄さん、作者さんは？」

レイン

「綺麗なお花畑を見に川を渡るってよ」

涙

「へー、じゃあ座談会の司会どうするの？」

レイン

「（…コイツ軽く作者の生存確認スルーしてねえか？）

みてえだな。まあ作者の持ってたカンペやら書類やらがあるからこの題は俺達で片付けよう」

涙

「うん！りょうかい！」

~~~~~

レイン

「まず涙、お前のモデルとなった人物はさっきのフェイトだ。後一人居るが…」

涙

「もう一人？二人もモチーフにするなんて結構贅沢だね」

レイン

「もう一人は…作者の姉とあるな」

涙

「へえ。どんなところをモチーフにしたの？」

レイン

「髪型と高校生時代の服装らしい。

お前の初登場時制服を着させてたのは姉が普段制服で居ることが多かったから、

そこからとったとカンペには書いてある」

涙

「…ねえ、兄さん」

レイン

「ん？どうした」

涙

「兄さんのモデルって誰なの？見せて見せて」
（ヒョイパシッ

レイン

「あ！…やれやれ」

涙

「えつと、何々？

『レインのモデルは少し複雑で、

ダンテ、アクセラレータ一方通行、周防達哉
比率としては

（ダンテ）8：（アクセラ）1：（周防）1』

…彘？」

レイン

「そこまで意外か？」

涙

「だ、だってホラ！

ダンテさんはわかるけど残りの二人のイメージが兄さんに出てないよ？！」

レイン

「そこは俺の表面上のもんじゃねえだろうな。

多分アクセラなら御坂妹を殺した罪…

周防ならペルソナ2罪、罰で味わった苦しみということだろう」

涙

「…ごめん。無神経だった」

レイン

「気にすんな。座談会の空気を重くされる方が困る。

…ホレ、次の題へいこうぜ」

涙

「う、うん！」

●2:「Devil Dead Night」一番最初の原案はこんな感じだった！？」

涙

「まだ原案を練ってる時の作品ってこと？」

レイン

「ああ。

だが説明がまどろっこしいな…

本人がゲストとして（正式に）来る予定らしいからそっちに直接話してもらうぜ」

涙

「兄さんの元ネタの人…誰なんだろう？」

レオン

「よう、お二人さん」

レイン

「…お前か？ゲストは」

涙

「…え！？兄さんが二人！？」

レオン

「反応がベタだな。まあ楽しくやろうぜ」

レイン

「お前の服装と髪型はDMC4のネロか。

…だが顔つきは俺と似てるな。作者あんま元ネタ変えなかったのか？」

レオン

「さあな？」

涙

「うんと…自己紹介してもらえますか？」

レオン

「レオンだ。本名は北宮 甲賀。」

レインと同じスパイダの末裔だ」

レイン

「…待てよ？お前の本名——」

レオン

「よく気付いたな？」

俺の名字はお前達二人の名字に使われた漢字で出来ている。

まあ実際は俺の名字を基にそっちの名字を作ったんだがな」

涙

「レオン君が主人公の Devil Dead Night はどんなストーリーだったの？」

レオン

「もうなんかすげー慣れ親しんでるなあんだ…」

まあそれはいいか。ストーリーだが、

一番最初の原案はよくあるオリ主転生のテンプレものだったんだ。んで、その内容がDMC4のネロの能力を得た俺が fate やらリリなのの世界に行く予定だったらしい」

レイン

「ほお。」

…しかし俺の異世界介入も十分テンプレものじゃねえか？」

レオン

「そこはまあ…ウチの駄作者だ。よくあることだろう」

涙

「でも兄さんとレオン君凄く似てるね…」

レオン君の方を基に兄さんの容姿を構成したの？」

レオン

「いや、違うな。」

俺の容姿はもともとネロを基準に作られてたんだ。

しかしレインの場合はダンテを基にしている。

要はお互い何もかも同じってわけじゃねえってことだ」

レイン

「…なんかDMC原作キャラをパクってるあたり
作者が面倒くさがっていた傾向が目に見えんだな。
後で脳天を対物ライフルでぶつとばしておくか」

涙

「ダメだよ兄さん！

証拠隠滅が大変だよ？」

レオン

（この二人怖え）

3：新連載！？

レイン

「これこっちの作品に関係ないよな？

燃やしちゃっていいよな？

あんの駄作者がああああ！！！！

メチャクチャな内容のカンペ作ってんじゃねええええ！！！！」

涙

「お、落ち着いて兄さん！

とりあえず読もう！ね！？」（アワアワ

レイン

「…ハア。

まったく、しゃーねえな…

（ピラ）何々？

『今回は私ことクレドが一月から連載を開始する予定の小説

「魔法少女リリカルなのは Masked vandals

razy」の

説明をします。が、メンドいので主人公呼んだy（ry」

涙

「…うん、なんだか怒る兄さんの気持ちがあった気がする」

レイン

「というか、今回の座談会ほぼ俺とお前で司会やってねえか？

作者やる気あるのか？」

涙

「あ、あはは…ん？なんだろこの音」

ブoooooooooooo……

レイン

「ッ！？マズイ、伏せる涙！」

涙

「え！？」

【地の文が出てくるよ！】

ドゴオオッ！！！！

建物が崩れたかのような音を立て、
座談会場のモダンな木製の扉が一瞬にして大小様々な木片と化した。

出来事は一瞬。

だが、ハイスピードのまま扉を突き抜けて中へと侵入してきた存在は、

1秒程度で収まりを迎えるようなヤワな存在ではなかった。

会場のフローリングの床と硬い何かが急激に擦れ合う音が会場に響く。

ドアだった場所に通じている外からの埃と、摩擦によって生じた床の破片が薄い煙幕となってレイン達の周りに立ち上る。

身体的な危機を察知し、咄嗟に涙を脇に抱きかかえて元居た位置から飛びのいたレインは埃を避ける少々口元を押さえても侵入者から視線を離さなかった。

その双眸は、警戒心と涙を攻撃したことへの怒りが滲み出ていた。

涙は反射的に受け身を取っていたが、侵入者の登場を煽る土っ気のあるスモークをもろに吸い込んでしまい涙目で咽込んでいた。埃が目に入らない様にゆっくりと瞼を上げる。

そして彼女は先ほど耳にした音の正体を眼にした。

「…バイ、ク？」

無骨なバイク

豪快さのあるその巨体は、バイクの中でも芸術的であろう。尤も今の様な突貫を目的に使われるのでなければ——だ。

その乗り手である男が此方へ視線を向ける。

その姿を見て涙はさらに驚愕した。

（あの人…ヘルメットもつけてない！？）

そう

普通安全運転をしていてもヘルメットを付けなければ安全とは言い切れない状況は多々ある。

が、侵入者はあるうことかあのスピードで突っ込んできたにも関わらず、

ヘルメットどころかプロテクターすら付けていない様子だ。

煙のせいでまだよく認識できないが、少なくとも涙に侵入者が以上であることは易々と予測できた。

埃の煙がはれて、襲撃の当事者の姿がきっぱりと露わになる。

侵入者は鮮血の様に赤い奇怪な模様の仮面をつけた——体格が
らして恐らくレインと同じ年齢の男だろう——人物だった。

服装は黒一色で、漆黒のトレンチコートにズボンといういでたちだ。
身のこなしも只者ではなかった。

男はまたがっていたバイクから身軽に飛び降りると、

薄手の黒いグローブを身に付けた両手を自分の腰にまわした。

武器を取るつもりだ、マズい——

涙はそう直感し、咄嗟に反撃を試みようとした。

が、彼女は忘れていた。

「Hey, boy.

奇抜なサンタは待つてる子供を泣かしちまうぜ?」

こういう時、必ず大人になれない人間がレインであることを

侵入者の喉元にデッドフアングの切っ先を突き付ける。

だがそれに反応した侵入者もとんでもない速さでレインの頭に銃口を向けた二挺拳銃を突きつける。

緊迫した空気の中、男が落ち着いた雰囲気のでたちに似合わぬ軽い調子で喋り始めた。

「ハッ、いいねいいね!

戦いの中のこういうスリルってのはどうしてもやめられねえ! テメエもそうだろ?!」

レインが口角を僅かに釣り上げ、言葉を発する。

「huh、趣味は合いそうだな？
だが生憎クレイジーな野郎に休憩時間を邪魔されるのは好きじゃない

——首に風通しのいい穴を作ってやるぜ、ク
ソ野郎」

「Hya-haha!
血だ！血だ！血だ！
デカイ水たまりにしてやるよ——
——テメエの血をな！」

まさに一触即発な空気

…だった（・・・）

「待ちなさああああい！！！」

「∴What？」

「あん？」

「ブラッド！あなたって人はなにしてるんですかああああ！」

現れたのは金髪の少女。

恐らく15歳ほどだろう。まだ幼げが残っていた。

少女が恐ろしいまでに巨大なハリセンを持って侵入者へと向かっていく。

それを見たブラッドと呼ばれた男は「げ！」というような素振りを

見せ、

あわてて先ほどまで乗っていたバイクに跨りエンジンをかけた。

そして啞然としているレインと涙の方へ顔をむける。

「チイツ、今回は邪魔が入った！

あのハリセンはマジでイテェんだよ！

…俺はブラッド、「マサクリ・ブラッド」だ！

「魔法少女リリカルなのは Masked vandals
razy」の

主人公（予定）だ！

今度会うまで覚えとけ！じゃあな！」

言いたい放題台詞を吐いた後、ブラッドのバイクが轟音を上げて外へと飛び出した。

金髪の少女が人間とは思えない速度で相も変わらずそれを追いかけてゆく。

「…なんだっただろ？あの人たち」

「…ハア、今日はつくづく厄日だ」

~~~~~

レイン

「まあなにかとグダっちまったが…」

涙

「でも楽しかったよ！」

レイン

「…ha、そうだな。」

これから「Devil Dead Night」をよろしく頼む。

そして新連載予定の

「魔法少女リリカルなのは Masked vandals crazy」も

もしよければ楽しみにしていてくれ。

それじゃ——「」

レイン&涙

「「Merry Christmas! and Happy new year!」」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5255v/>

---

Devil Dead Night

2011年12月25日23時03分発行